

人類学博物館紀要 第40号  
(ISSN 0388-8711)

# 南山大学人類学博物館紀要

## 第40号

南山大学人類学博物館

2021



口絵1 ウジャマ彫刻



口絵2 ウジャマ彫刻



口絵3 シェタニ像



口絵4 抽象彫刻



口絵5 抽象彫刻



口絵6 抽象彫刻

## 巻頭言

人類学博物館が「ユニバーサル・ミュージアムを目指す博物館」としてリニューアルしてから2021年で8年が経った。具体的には全面的な「さわる展示」を実現したわけだが、それ以来頭を悩ましてきたことの一つに、「さわる展示」の意義をどこに求めるか、ということがあった。もともとは視覚障害者が楽しめるということを前提にしていたが、当然ながら、利用者としては晴眼者（＝見常者）の方が多い。その見常者が視覚ではなく、触覚で展示を楽しむことの意味を考え続けてきたのである。

特に、コロナ禍の中で「さわる」こと自体が忌避される傾向にあり、また、博物館的には資料の劣化や破損の原因になるのだから、そうした状況や批判に対してわれわれも理論武装をする必要があるのである。

だが、その答えを得ることができないまま、現在に至っている。そんなとき、「さわる展示」の意義が説明できないのは、自分たちの側に「さわる」ことで感動したとか、何かがわかったという経験が乏しいことに気がついた。自分が経験していないことを、誰かに伝えることなどできるわけがない、という当たり前のことが答のヒントだったのである。

そうした中で、2021年9月から11月まで、国立民族学博物館で特別展『ユニバーサル・ミュージアム さわる“触”の大博覧会』が開催された。この特別展は現在のユニバーサル・ミュージアムの活動をけん引する広瀬浩二郎准教授によって企画されたもので、展示全体が「さわる」アート作品で構成されている。この特別展に足を運んで初めて、「さわる」ことの楽しさを体感できたのではないかと思う。それは「さわる」こと自体の楽しさであり、また、「さわる」ことによって見る鑑賞と近いレベルでの鑑賞体験が得られたからである。

しかし、鑑賞体験は感性の体験であり、その意味では美術館的な体験であるといえる。そうした感性の体験を感覚的ということで「原初的体験」とすれば、博物館としては、「さわる」という原初的（野生の）体験、アリストテレスのいう「ピュシス（自然）」の状態をいかにしてロゴス（言語化、論理化）化していくかが問われることになる。

いずれにせよ、この特別展で得られた経験が、「さわる展示」を次のステップに行くための起爆剤になれば、と思っている。

2022年2月  
南山大学人類学博物館

## 目 次

卷頭言

南山大学人類学博物館の林魁一コレクション（1）—土器—

..... 湯屋秀捷・岡 智康・秦優莉香… 1

南山大学人類学博物館が所蔵するマコンデ彫刻について

..... 井原瑠梨… 29

南山大学人類学博物館所蔵考古資料の現状と課題——資料番号の整理から——

..... 秦優莉香… 45

# 南山大学人類学博物館の林魁一コレクション (1) —土器—

湯屋秀捷・岡 智康・秦優莉香

## はじめに

南山大学人類学博物館では、数多くの考古資料を収蔵している。これらは、購入、寄贈、調査によって収集されたもので、現状ではいつどのように入手されたのか確認できている資料と詳細不明な資料が混在している。『南山大学の人類学』（南山大学史料室 2011）には、当館の前身となる南山大学人類学民族学研究所の概要やその収集資料について言及されているが、「合計標本 2 万点を超ゆ」など大まかな内容に留まっている。

当館の来歴については『HOMINIS DIGNITATI 1932-2007 南山大学創立 75 周年記念誌』（南山大学創立 75 周年記念誌編纂委員会 2007）や当館紀要 32 号に詳しい（黒沢 2014）。当館の場所の変遷のみ挙げると、1949 年に五軒家町にて設立、1964 年から 1973 年までは現在の南山大学図書館の地下 1 階、1973 年からは図書館の 3 階、1983 年から 2012 年 5 月までは G 棟地下 2 階、移転のための休館期間を挟んで 2013 年 10 月以降から現在に至るまでが R 棟地下 1 階となっている。また、現在 G 棟の旧博物館展示室については資料の収蔵場所として活用している。

考古資料は、展示資料以外の多くが G 棟の収蔵庫<sup>(1)</sup>に保管されていたことが記録に残っている。1968 年の南山大学人類学研究所陳列室日誌には、11 月 13 日に「図書館地階から G 棟南倉庫へ考古学資料移転」という記述が残っており、博物館（人類学研究所陳列室）が図書館内にあった時期から考古資料が離れた場所で保管されていたことが確認できる。

また、G 棟の収蔵庫に多くの考古資料が保管されていることは早くから当時の学生間でも知られており、1976 年には南山大学文化人類学研究会考古サークルが『51 年度 G 棟地下収蔵遺物移動に関する報告 I—特に市川市寄贈遺物について—』という冊子を限定 30 部発行している。当館において、収蔵遺物の全

体像を把握するための確認作業はこれまでに何度も試みられてきたが、様々な理由から完了には至っていない。しかし、考古サークルの整理はその後の博物館の考古資料整理や、収集地誤認防止に大いに役立てられてきた。

さて、本稿では当館の所蔵する様々な考古資料のうち、林魁一コレクションについて報告していく。林魁一コレクションには土器、石器、その他の資料が含まれており、今回は資料の受け入れの経緯についてと、土器についての報告を行う。

林魁一コレクションは数点～数十点ずつ小箱に入れられ、小箱には収集地や資料点数が記されていた。1983 年 6 月 8 日に箱書きと資料点数を確認したという整理記録が残っているが、その時点で林魁一資料と思しき資料の存在も示唆されており、全体数はやや曖昧である。また、整理記録のみで遺物の調査や報告は行われなかった。

林魁一コレクションはその後、小箱をおそらく 4 箱の木箱にまとめて長年収蔵庫（北倉庫）に保管されていた。整理をした当時の担当者は「林魁一」が何を示すか分からなかったようで、「林魁 (1)」、「林魁 (2)」、「林魁 (3)」、「林魁 (4)」という整理記録を残している。現在は 4 つのプラスチックの薄型運搬容器（当館ではテンバコと総称）に入れ替えて保管をしている。

2009 年には「林魁一」コレクションとして外部からの資料調査を受けながらも、やはりコレクションの全体像を確認できるような整理作業や報告は行われてこなかった。

## 1. 林魁一について

林魁一氏（以降林氏）は、1875（明治 8）年 12 月 7 日に岐阜県加茂郡太田町（現美濃加茂市）に生まれ、1961（昭和 36）年 12 月 24 日に亡くなるまで岐阜県

を中心に、主に考古学資料の調査研究を行った研究者である。1895（明治28）年に岐阜中学校を卒業後、弟の眼病治療の付き添いとして上京し、東大病院の眼科に隣接していた人類学教室を訪れ坪井正五郎、八木契三郎、鳥居龍蔵などの研究者から人類学、考古学の教えを受ける機会に恵まれた。林氏自身も岐阜中学校在学中に雑誌で坪井の論文を読み、石鏃、石斧が石器時代の遺物であることを知ったこと、上京中の2ヶ月間に度々人類学教室を訪れ坪井や他の研究者の説を聞き、鳥居について西原貝塚を調査したことなどを記述している（林1914）。

その後、岐阜県に戻ってからは加茂郡太田、古井、土田などの古墳や遺跡を調査し、土器や石器類を採集した。その成果は『東京人類学雑誌』（後の『人類学雑誌』）や『考古学雑誌』などに次々と掲載された。岐阜県を中心に研究調査を重ねる林氏の名は全国に知られ、「東京大学、京都大学、南山大学をはじめ各地の研究者が指導をうけに訪れてくる」（岐阜タイムズ昭和33年2月5日）と新聞紙に掲載されたように、南山大学との関りが深かったことが見受けられる<sup>(2)</sup>。

東濃や飛騨地方の土俗、民俗学研究も行い、蘇陽という雅号を持つ林氏は、岐阜県に根付く考古学者として、文化人として岐阜県において特に尊敬を集める人物であった。林氏の詳細については美濃加茂市民ミュージアム紀要第4集に詳しい（藤村・杉浦2005）。

## 2. 資料の受け入れについて

当館の林魁一コレクションは、まとまった数があるものの、前述の通り記録がほとんど残っておらず、いつどのように資料の受け入れしたのか分からない状態であった。林魁一コレクションの目録とみられる手書きの紙資料を、所蔵している書類資料<sup>(3)</sup>の中で確認していたが、どの時点で作成された目録なのか、当館所蔵の林魁一コレクションの目録なのか、などの詳細は不明であった。目録の表紙には「岐阜県加茂郡太田町林魁一氏所蔵考古学遺物目録」の他に、日付と資料点数とみられる情報が記載されている。しかし、日付部分など、読み取りが困難な部分があるため、存在を認識する程度に留められていた。

2021年10月、同じく林氏の資料が寄贈され、調査研究を進められている美濃加茂市民ミュージアムの藤村俊氏にご教授いただいた結果、南山大学への寄贈が昭和25年1月に行われたことが確認できた<sup>(4)</sup>。これ

に伴い、同年代の書類資料を確認したところ、林氏や林魁一コレクションの受け入れに関する記述を発見することができた。南山大学人類学民族学研究所の伊奈森太郎氏が「林魁一翁の横顔」で下記のように述べている。

「私が初めて面会したのは、昭和二十五年一月であったが、豫め通知しておいたので、十年の知己の如く、迎えられて、一日をこたつてくつろぎ語つた。南山大学へコレクションの一部を割譲されたのもそれが縁となつたのである」（伊奈1953）。

伊奈氏は戦前から愛知県教育界で活躍し、人類学民族学研究所に所属後は地元市町村行政機関や研究者、地権者との交渉を担当した人物である（安藤・松原・伊藤2007）。林魁一コレクションがいつ寄贈されたのかだけでなく、寄贈の経緯についても確認できたことは一つの成果である。資料の分析を行った湯屋によると、当館に寄贈された資料は種類に偏りがあることから、単なるコレクションの割譲ではなく、意図的に選ばれた資料が当館に寄贈された可能性も考えられる。

また、伊奈氏の直筆書類と目録の筆跡を見比べたところ、同一の可能性が高く、日付についても「昭和二十五年一月五日」と書かれているように見え、伊奈氏が林魁一コレクションを受け取る際、または受け取った後に作成した目録ではないかと推測できる。今後、所蔵している資料と目録が対応しているのかについて調査を進める必要がある。

## 3. 人類学博物館の林魁一コレクション概要

土器の報告に先立って、コレクション全体について報告する。今回の報告の対象である林魁一コレクションは、2021年度に行われた人類学博物館収蔵資料室への資料収蔵棚設置に伴う整理作業の中で、改めて所在が確認されたものである。

資料は土器、石器を中心に構成され、総点数は、土器158点、石器307点、その他金属器や骨角器等17点の合計482点である〔表1、2〕。これらの資料は、採集地毎に紙製の黒色の箱に入れられており、概ね土器と石器で箱が分けられている。箱は60点を数え、それぞれに採集地が墨書された紙が貼り付けられている。箱には他に箱番号（001から058）と棚番号（c-□）が振られている。これらの番号は資料寄贈の際に付与された番号ではなく、付与された時期も不明であるが、1983年に、KHという人物がコレクションの内容と前述の番号を書き出している記録が人類学博物館

に残されているため、少なくとも1983年より以前に付与されたものだろう。

資料の採集地は岐阜県内が多いが、愛知県や岐阜、朝鮮が採集地とされた資料もある。岐阜県内では、加茂郡が採集地となっている資料が最も多く、次いで益田郡、吉城郡が多い【図1、2】。土器と石器の採集地の分布に差異は無く、概ね同一の分布であるが、岐阜県外で収集された資料は、愛知県中島郡馬見塚発見とされる打製石斧1点を除いて全てが土器である。

#### 4. 林魁一コレクションの土器

##### 資料の記載方法

前述したように、コレクションの資料は採集地が判明している。ここでは、土器を採集地ごとに記載する。

##### (1) 吉城郡國府村廣瀬（高山市国府町）（図3-1~3）

3点採集されており、2点は口縁部である。

口縁直下に横位の隆帯、横位隆帯に接するように山形の隆帯が貼付され、隆帯には刻みが施されるものや（図3-2）、弧状の隆帯に刻みが施されるものがある（図3-3）。

前者は鷹鳥式並行と思われ、その他の土器片も縄文時代中期の特徴を有している。

##### (2) 大野郡清見村牧ヶ洞岩野（高山市清見町）（図3-4~10）

7点採集されており、うち3点は底部である。

胴部は稲妻状文が施されているものがあり（図3-10）、また底部には網代圧痕が見られるものがある（図3-6）。

時期は判然としないが、岩野資料は少なくとも縄文時代後期に属するといえる。

##### (3) 古井町下古井字ニツ塚（美濃加茂市川合町ニツ塚遺跡か）（図3-11~27、図4-1~40）

56点採集されており、口縁部が17点、胴部が35点、底部が4点採集である。

集合沈線文が施されるもの（図3-12）、交互刺突文が施されるもの（図4-25）、縄文地に隆帯が施されるもの（図3-11）、縄文地に沈線が施されるもの（図4-7、図4-18、図4-24、図4-31）、蕨手状の凹線内に半截竹管による刻みが施されているもの（図4-14）、渦巻文が施されるもの（図4-9、図4-26、図4-27）、楕

円区画内に縄文を施すもの（図4-8）、磨消縄文を有するものがある（図3-14）。

ニツ塚資料は縄文時代前期末から後期に属するが、主体は中期である。

##### (4) 古井町下古井石坂（美濃加茂市古井町下古井）（図4-41~45、図5-1~9）

14点採集されており、口縁部が4点、胴部が6点、底部が4点である。

口縁部内面に粘土が貼付され、口縁部内面付加粘土と器壁外面に刻みが施されるもの（図5-6）、凹線が施されるもの（図5-5、図5-8）、二条の横位沈線間に刻みが施され、その下位に二条の縦位沈線と斜行する条痕が引かれるもの（図5-4）、三条の横位沈線下位に縄文が施され、そのさらに下位に蛇行する横位の沈線が引かれるものがある（図4-41）。

石坂資料は縄文時代前期から中期に属し、やはり主体は中期である。

##### (5) 古井町下古井八坂近傍（美濃加茂市古井町下古井）（図5-10~20）

11点採集されており、口縁部が2点、胴部が8点、底部が1点採集されている。

凹線を施したもの（図5-10）、縄文地に縦位の隆帯を貼付し隆帯が押捺あるいは豆状のもので押圧されたもの（図5-13）、縦位の蛇行沈線が施されるものがある（図5-12）。

八坂資料は縄文時代中期に属するといえる。

##### (6) 吉城郡坂下村塩屋川欠地（飛騨市宮川町塩屋）（図5-21~25）

5点採集されており、うち3点は口縁部である。

塩屋で採集された資料には、右下がりに斜行する二条の沈線間に刻みが施されるもの（図5-21）、横位沈線の下位に連続する渦巻文とそのさらに下位に窓枠状の沈線が施され、渦巻文両側に縄文が施されるもの（図5-25）、縄文地に入れ子状の窓枠区画が施されるとともに二条の縦位沈線間に刻みが施されるもの（図5-24）が含まれる。

図5-24と図5-25は新保・新崎式に相当し、図5-21は器面の剝落がひどく特徴を判別しづらいが、新保・新崎式あるいは上山田・天神山式に相当するものと思われる。よって塩屋資料は縄文時代中期前葉から中葉が主体といえる。



(7) 吉城郡阿曾布村石神（飛騨市神岡町鹿間）（図5-26~27）

2点採集されており、うち1点が口縁部である。

押引文に連続する渦巻文とその左右から三条の弧状沈線が施され、渦巻文と沈線の下位に刺突文が充填されている。弧状沈線は渦巻文同士を連繋するものと見てとれ、中富・神明式に相当する（図5-26）。もう1点の胴部片は指によって凹線が施されている（図5-27）。

以上から鹿間資料は少なくとも縄文時代中期中葉に属するといえる。

(8) 郡立郡東村曾師字上木□（下呂市金山町）（図5-28~30）

3点採集されており、うち1点が口縁部である。

沈線が施文されたもの（図5-28）、須恵器（図5-29）、器面の損耗が激しく特徴が判然としないものが1点ずつ採集されている（図5-30）。

(9) 小坂町大字落合（下呂市小坂町落合）（図5-31~42）

12点採集されており、うち1点が口縁部、1点が底部である。

沈線が施されているもの（図5-31、図5-32、図5-33）、微隆起線が形成されているもの（図5-33）、押引によって施文されるものがあるが（図5-35）、全体像が判然としない。

文様の特徴から縄文時代前期末から中期に属すと思われる。

(10) 川西村西上田（下呂市萩原町西上田）（図6-1~4）

4点採集されており、すべて胴部片である。

刻みが施された二条の横位隆帯間に沈線が引かれ、横位隆帯に接して円状の隆帯と、円状の隆帯を囲むように半円状の隆帯が形成されるもの（図6-1）、楕円状の隆帯とその中に花卉状の隆帯が、花卉状隆帯からは垂下する三条の隆帯が形成されるものがある（図6-2）。他には磨消縄文を有するものと（図6-3）、縄文が施されるものがある（図6-4）。

図6-1は古府式、図6-2は勝坂式に相当し、西上田資料は縄文時代中期が主体的といえる。

(11) 坂祝村酒倉芦渡（加茂郡坂祝町酒倉芦渡）（図6-5~18）

14点採集されており、うち口縁部が2点、底部が2点である。縄文地の土器とナデ調整された土器の二種類が見られた。縄文地の土器は長方形の区画が施され区画外が磨り消されている。区画は底部に向かって収束していくものであり、加曾利E IV式に比定される（図6-5）。

ナデ調整による土器は縦方向の二条の沈線の両脇に綾杉文が施文されている土器がある。これは曾利式に比定される（図6-6、図6-7、図6-9、図6-12）。また別に、横長の窓枠区画文とその下位に区画してから、右下がりの斜行する沈線を連続して施した土器（図6-10）や無文の土器（図6-11）がある。

(12) 和知村牧野字嶋崎（賀茂郡八百津町）（図6-19~21）

3点採集されており、すべて胴部片である。

微隆起線で形成された区画内に細沈線が施されている（図6-20、図6-21）。

(13) 愛知県名古屋市区西志賀町西志賀貝塚（名古屋市区西志賀町）（図6-22~28）

7点採集されており、うち3点が口縁部である。

ナデ調整されているものがほとんどで、中には横位の連続沈線とその下位に横位の連続する刻みが施されたのち隆帯を貼り付けられたものや（図6-22）、縄文の下位に横位の連続沈線が施されたものなどがある（図6-23）。

(14) 丹羽郡千秋村（一宮市千秋町）（図7-1~3）

3点採集されており、うち1点が口縁部である。

口唇部には回転縄文による調整ののちに縦位の沈線が連続して施されるもの（図7-1）、羽状条痕が見られるもの（図7-3）、格子状に沈線が施されるものがある（図7-2）。

(15) 愛知県中島郡西成村馬見塚字三家田（一宮市馬見塚）（図7-4~7）

馬見塚遺跡の表採資料の可能性が高い。4点採集されており、2点が底部、1点が縦に半割された状態にある。

高坏はユビオサエによって器面調整されており（図7-4）、底部は回転縄文によって調整されている（図7-5）。壺は内面がユビオサエによって調整されてお

り(図7-6)、甕は内外面ともにハケメ調整されている(図7-7)。

#### (16) 壱岐原ノ辻(壱岐市芦辺町深江鶴亀触)(図7-8~9)

底部が2点採集されている。

胴部外面がハケメ調整されており、底面に圧痕は確認できない(図7-8)。もう一点も同様にハケメ調整されている。底面にも粘土が動いた痕跡があるものの、器面が荒れており詳細は不明である(図7-9)。

#### (17) 壱岐國加良加美山貝塚(壱岐市勝本町東触)(図7-10~11)

2点採集されており、2点とも胴部である。

胴部片2点は1点が甕で、1点が壺である。甕は口縁部にほど近く、鏝状の突帯が残存している。突帯の上下には縦位のハケメ調整痕があり、突帯直上と直下はナデ消されている(図7-11)また壺は頸部直下の胴部片であることはわかるが、器面の損耗がひどく調整痕の確認は困難である(図7-10)。

#### (18) 田浦貝塚(大韓民国広域市釜山鎮区田浦駅)(図7-12~15)

4点採集されており、うち3点が口縁部である。

口縁部が残存している資料はすべて甕で、内外面ともにナデ調整されているもの(図7-14)、胴部にハケメ調整痕が残るもの(図7-13、図7-15)、ナデあるいはヘラミガキ調整がされているものの器面の損耗で判別できないものがある(図7-12)。

### 地点別土器分析の総括

縄文時代から歴史時代まで幅広く採集されているが、主体となるのは縄文土器である。縄文土器も前期後葉のもの(諸磯式並行)から磨消縄文を特徴とする後晩期のものまで採集されているが、中期が主体となっている。中でも北陸地方の特徴を有する土器が多く、次いで中部高地系、東海系の特徴が表れている。近畿地方の影響は前期後葉と中期初頭の土器にやや見られるが、以降のものにはほとんど見受けられない。

土器の中には、林魁一の発表したものと同一の資料があることを確認しており、益田郡川西村西上田発見とされる土器3点は、1935年発行の『人類学雑誌』51巻4号、「飛騨國益田郡川西村西上田に於ける遺物及び竈跡の発見」で報告される拓本と一致する。

## 5. コレクションの特徴

コレクションの特徴は、美濃加茂市民ミュージアムの林魁一コレクションの資料の特徴と比較すると顕著な差異が認められる(藤村・杉浦2005)。美濃加茂市民ミュージアムのコレクションに縄文・弥生土器が少なく、かつ小破片が多いのに対し、人類学博物館のコレクションの土器は、縄文土器、弥生土器が大半を占め、かつ土器の文様が明確なものが多い。

また、石器は石鏃、石匙、石錐などの剥片石器、打製・磨製石斧、切目石錘などの資料で構成され、剥片石器が最も多い。この傾向は、剥片石器がほとんどみられない美濃加茂市民ミュージアムのコレクションとの大きな差異である。一方で、須恵器、土師器、近世陶器は少量で、復元に耐えうるような大型の資料は無い。これらのことから、人類学博物館のコレクションは、何らかの意図をもって林魁一の所蔵資料の中から選ばれ、寄贈された資料とみて問題ないだろう。

更に、当館へ寄贈されたコレクションの中には、林魁一が自身の論文の中で報告した資料と同一の資料がある。土器は拓本による報告が少ないため、同一のものとは判断できた資料は3点のみであったが、石器資料は図面をもって報告された資料も多いため、今後照合作業も併せて行う必要がある。

## おわりに

以上が、南山大学人類学博物館へ林コレクションが寄贈された経緯とコレクションの概要、土器についての報告である。今回図面を作成し報告することができたのはコレクションの一部であり、人類学博物館のコレクションの特徴のひとつである剥片石器については未だ手つかずの状態である。今後に残された課題は多い。

今回の資料整理は学生を主体として行われた。作業方針から紀要執筆にあたっては黒澤浩先生から、コレクションの全体像や林氏については美濃加茂市民ミュージアムの藤村俊氏から、多大なご教示をいただいた。また、人類学博物館のスタッフ皆様からも、資料や施設の利用において様々な便宜を図っていただいた。

そして本稿は、南山大学大学院人間文化研究科人類学専攻に所属する湯屋、岡と、南山大学人類学博物館学芸員である秦によって執筆された。本文のうち、はじめに、1節、2節の執筆を秦が、4節の執筆を岡、3

節、5節、最終節の執筆および全体の構成・編集は湯屋が、それぞれ分担して行った。図面作成は、湯屋、岡を中心に作業が進められ、同研究科同専攻に所属する加藤大智、吉川主浩の協力があつた。

今回の作業に関わつた全ての方に、深甚の感謝申し上げます。

## 註

- (1) 地下南倉庫、地下北倉庫または単に南倉庫、北倉庫と職員や学生間で通称された収蔵庫がG棟付近に存在した。両倉庫には考古資料に加えて、1983年以降寄贈の受け入れを開始した生活史資料などが保管されていたが、現在は取り潰されて存在しない。
- (2) 林氏が自宅で保管していた資料を、授業またはゼミの一環で訪問した学生がスケッチを行った記録が散見される。日時の記載のみのものが多いが、1952(昭和27)年と書かれた記録も混在している。また、林氏は1955(昭和33)年5月21日に南山大学で開催された第10回日本人類学会・日本民族学協会連合大会の準備委員会地区委員会に委員として出席している。この連合大会に伴い、同年10月10日～11月6日の期間中、名古屋市東区の徳川美術館で「中部日本古代文化展」という展覧会が開催された。林氏は、自身の所有する資料をこの展覧会に出陳している。先に林氏から当館に寄贈された林魁一コレクションの資料も、展覧会の出陳資料に含まれていたようである。
- (3) 当館紀要第27号にて言及されている、伊藤秋男氏が1969(昭和44)年に入手した南山大学人類学民族学研究所の一連の活動記録書類のこと(吉田2009)。林魁一コレクションの目録はB5便箋9枚紐綴じで、他の書類資料と共に「雑録」という表紙のまとまりに含まれていた。
- (4) 「昭和二十五年一月多年採集した貴重な資料を、南山大学の研究室に寄贈された。」(高島1984)。「林さんが集めた土器其他の古い参考資料は、昭和二十五年一月トラックに満載して名古屋南山大学の研究室に運ばれまたと得難い考古学研究資料として珍重がられ、翁が生涯かけての血と汗の結晶であるともいえよう。」(林1953)の二記述による。

## 文献

- 安藤義弘・松原隆治・伊藤秋男  
2007「中山英司と愛知の遺跡」、伊藤秋男先生古希記念考古学論文集刊行会編『伊藤秋男先生古希記念考古学論文集』、383-536頁。
- 泉拓良  
2008「鷹島・船元・里木Ⅱ式土器」、小林達雄編『総覧縄

- 土器』、502-509頁、『総覧縄土器』刊行委員会。
- 伊奈森太郎  
1953「林魁一翁の横顔」『人類学研究』第1巻第3号：1、人類学研究会。
- 今福利恵  
2008「勝坂式土器」、小林達雄編『総覧縄土器』、392-401頁、『総覧縄土器』刊行委員会。
- 加藤三千雄  
2008「新保・新崎式土器」、小林達雄編『総覧縄土器』、450-457頁、『総覧縄土器』刊行委員会。
- 狩野睦  
2008「串田新・大杉谷式」、小林達雄編『総覧縄土器』、480-485頁、『総覧縄土器』刊行委員会。
- 榎原功一  
2008「曾利式土器」、小林達雄編『総覧縄土器』、426-435頁、『総覧縄土器』刊行委員会。
- 黒沢浩  
2014「人類学博物館のリニューアル」『南山大学人類学博物館紀要』第32号：1-18、南山大学人類学博物館。
- 額綱茂・高橋健太郎  
2008「中富式・神明式土器」、小林達雄編『総覧縄土器』、494-501頁、『総覧縄土器』刊行委員会
- 小島俊彰  
2008(a)「蜷ヶ森式土器」、『総覧縄土器』、298-303頁、『総覧縄土器』刊行委員会。
- 2008(b)「上山田・天神山式土器」、『総覧縄土器』、466-471頁、『総覧縄土器』刊行委員会。
- 鈴木康二  
2008「特殊凸帯文系土器(北白川Ⅲ式・大歳山式土器)」、小林達雄編『総覧縄土器』、320-327頁、『総覧縄土器』刊行委員会。
- 関根愼二  
2008「諸磯式土器」、小林達雄編『総覧縄土器』、282-289頁、『総覧縄土器』刊行委員会。
- 高島博  
1984『中山道太田宿に生きた人々の系譜』、林印刷。
- 中野幸大  
2008「大木7a～8b式土器」、小林達雄編『総覧縄土器』、352-259頁、『総覧縄土器』刊行委員会。
- 南山大学創立75周年記念誌編纂委員会編  
2007『HOMINIS DIGNITATI 1932-2007 南山大学創立75周年記念誌』学校法人南山学園。
- 南山大学史料室  
2011『南山学園史料集6 南山大学の人類学』南山学園。
- 林魁一  
1914「美濃國に於ける石器時代遺跡及び遺物」『人類学雑誌』第29巻第5号：174-188、日本人類学会。
- 1954「吾が研究生生活の思い出」『郷土研究』第2編第1号：32-35、岐阜県立益田高等学校内郷土研究クラブ。
- 林亮三

1953「十四 考古学の大家林魁一翁」『なつかしの古里』、アヅマ写真館。

藤村俊・杉浦綾子

2005「寄贈された“林魁一コレクション”一資料の来歴が判明する資料を中心として」『美濃加茂市民ミュージアム紀要』第4集：1-14、美濃加茂市民ミュージアム。

細田勝

2008「加曾利 E 式土器」、小林達雄編『総覧縄文土器』、410-417 頁、『総覧縄文土器』刊行委員会。

増子康真

2008「北浦 C～北屋敷 II 式土器」、小林達雄編『総覧縄文土器』、486-493 頁、『総覧縄文土器』刊行委員会。

森幸彦

2008「大木 9・10 式土器」、小林達雄編『総覧縄文土器』、360-367 頁、『総覧縄文土器』刊行委員会。

吉田泰幸

2009「南山大学人類学博物館所蔵の「考古学研究の研究」に関する資料のアーカイブ化に向けて 附・第一展示室展示アルバム作成メモ追記」『南山大学人類学博物館紀要』第27号：1-13、南山大学人類学博物館。

表1 林コレクションリスト①

	箱番号	箱書	数量			備考
			土器	石器	その他	
1	001	岐阜県加茂郡坂祝村酒倉字芦渡発見 縄紋土器破片七個	9			
2	002	岐阜県賀茂郡坂祝村大字酒倉字芦渡発見 縄紋土器破片七個	5			
3	003	岐阜県加茂郡古井町下古井字石坂発見 縄紋土器破片九個	9			
4	004	岐阜県可見郡土田村発見 打製石斧 石棒折レ		5		石棒、打製石斧 3、石錘 1。
5	005	岐阜県加茂郡坂祝村酒倉字芦渡発見 石錘		15		内 1 点黒曜石。
6	006	岐阜県加茂郡古井町大字下古井字二ツ塚発見 縄紋土器破片九個	3			縄文土器
7	007	美濃國加茂郡古井町大字下古井字八坂近傍発見 縄紋土器破片	11			3 点 1 組で接合する遺物あり。
8	008	岐阜県加茂郡古井町二ツ塚発見 錘石		10		
9	009	岐阜県加茂郡古井町大字□井字二ツ塚発見 縄紋土器破片十五個	16			1 点接合する。
10	010	岐阜県加茂郡古井町下古井字二ツ塚発見 縄紋土器破片五個	5			
11	011	美濃國加茂郡和知村牧野字嶋崎発見 打製石斧三	3	3		
12	012	岐阜県加茂郡古井町大字下古井字二ツ塚発見 石錘十二個 □一個打石斧		20		
13	013	岐阜県加茂郡古井町大字下古井字二ツ塚発見 石錘十二個 □一個打石斧		13		
14	014	岐阜県加茂郡古井町大字下古井字二ツ塚発見 縄紋土器破片七個	6			
15	015	美濃國加茂郡古井町下古井字二ツ塚発見 土器破片九	9			
16	016	飛騨國益田郡下呂町大字森字峯イナゴ発見 打製石斧二 錘石一 石鏃六		9		
17	017	ヒダ益田郡川西村西上田発見 打石斧一		1		
18	018			5		打製石斧 5 点。
19	019	岐阜県美濃郡立郡小川発見 打製石斧四個 磨製石斧破片一個 外一個		6		
20	020	岐阜県武儀郡金山町字松葉野発見 石鏃五個		5		
21	021	岐阜県加茂郡蘇原村赤河字廣島発見 石鏃九個 打製石斧一		10		内訳は箱書の通り。
22	022	ヒダ國益田郡川西村西立田字神屋敷発見 石鏃二個 朱点アリ 同益田郡□瀬村西村小字山田発見 石鏃五個		6		
23	023	飛騨國益田郡旭日村立岩字宮之腰発見 磨製石斧三		3		
24	024	飛騨國古城郡國府村荒域発見 (小学校□□土地)		10		石鏃 8 点、磨製石器 2 点。
25	025	加茂郡川□町下川 可見郡□□□□□		5		打製石斧など。
26	026	美濃國郡立郡東村奥平発見 磨製石斧一 打製石斧一 同祖師野字□□発見 磨石斧		2		
27	027	飛騨國益田郡朝日村甲字森下発見 磨製石斧二 打製石斧一		3		
28	028	飛騨國益田郡朝日村見□ かまの 発見 石鏃		47		
29	029	岐阜県加茂郡下米田村為岡字小柳発見打製石斧 2 同恵那郡□木町蕪松発見 打製石斧 2 同加茂郡古井町□古井農林学校南発見 打製石斧三		6		遺物に注記あり。
30	030	飛騨國益田郡旭日村立岩字宮之腰発見 石鏃二十五個		25		

表2 林コレクションリスト②

31	031	岐阜県武儀郡富之保村発見 磨製石斧□ 石錘一 不明石器一 石鏃十六 【判読不能】 発見其他栗野字赤坂発見		19		
32	032	美濃国郡立郡東村曾師里上木□発見 打製石斧其他四個 同立発見縄紋土器破片	3	3		1点縄文土器ではない。1点打製石斧ではない。
33	033	飛騨國大野郡清見村牧ヶ洞岩野発見 縄紋土器破片九個	7			2組4資料が接合する。
34	034			3		
35	035	古井村川合 吉城郡郡立宮村		3		磨製石斧。遺物に注記あり。
36	036	ヒダ益田郡川西村西上田発見 土器	4			
37	037	ヒダ吉城郡國府村廣瀬発見 縄紋土器破片三個入り	3			箱内にメモ「ヒダ吉城郡田□村広瀬発見 縄文土器破片三個 林魁一」
38	038	飛騨國吉城郡阿曾布村石神 石鏃十五他四個	2	11		
39	039	ヒダ国益田郡小坂町大字落合発見 縄紋土器破片十二	12			
40	040	飛騨國益田郡旭日村立岩小字宮之腰 磨製石斧四 8.5.10		4		
41	041	岐阜県加茂郡古井町下古井町二ツ塚発見 打製石斧七個		7		
42	042			3		磨製石斧3点。
43	043	加茂郡古井町下古井字二ツ塚発見 石鏃及未製品十八		19		黒曜石1点。
44	044	美濃国加茂郡古井町下古井字石坂近傍発見 農林学校南 縄紋土器破片	5			
45	045	岐阜県加茂郡古井町下古井字二ツ塚発見 打製石斧6		10		
46	046	岐阜県加茂郡古井町下古井字二ツ塚発見 縄紋土器破片七個	8			
47	047	岐阜県加茂郡古井町下古井字二ツ塚発見 縄紋土器破片五個	4			1点は微細な欠片。
48	048	岐阜県加茂郡古井町大字下古井字二ツ塚発見 縄文土器破片九個	6			
49	049	岐阜県加茂郡古井町大字下古井字石坂発見 打製石斧四個		5		
50	050	愛知県中島郡西成村馬見塚字三家田発見 弥生式土器破片四個	4	1		打製石斧1点。
51	051	岐阜県加茂郡古井町下古井字二ツ塚発見 打製石斧五個		4		
52	052	岐阜県加茂郡古井町下古井字二ツ塚発見 打製石斧五個 □□井字川合発見 打製一個		6		
53	053	名古屋市西区西志賀町貝塚発見 土器破片七個	7			
54	054	朝鮮 東萊貝塚ノ貝カラ 五個			3	貝3点。
55	055	朝鮮田浦貝塚発見土器破片三	3			
56	056	尾張國丹羽郡千秋村字 発見 弥生式土器破片4	4			
57	057	壱岐国原之辻発見土器破片 石器時代 朝鮮田浦発土器破片 東□発 鹿角	2		1	鹿角1点。
58	058	壱岐國加良加美山貝塚田河山 発見土器破片三個	3			
59	059	ヒダ國吉城郡坂下村塩屋川欠地発見 縄文土器破片五	5			
61		金属器、玉等			13	耳輪、玉、管玉など
		合計	158	307	17	
				465	482	

表3 土器一覽表①

図版	採集地点	箱番号	器種	部位	胎土	色調		焼成	時代	型式	縄文	備考
						内	外					
1	3-1	吉城郡廣瀬	037	深鉢	胴部	細砂粒	暗灰褐色	暗灰褐色	良好	縄文時代中期		有
2	3-2	吉城郡廣瀬	037	深鉢	口縁部	砂粒含	明茶褐色	明茶褐色	良好	縄文時代中期		
3	3-3	吉城郡廣瀬	037	深鉢	口縁部	黒色細砂粒多	暗灰褐色	明茶褐色	良好	縄文時代中期		
4	3-4	牧ヶ洞岩野	033	深鉢	底部	砂粒多	明茶褐色	明茶褐色	一部不良	縄文時代		
5	3-5	牧ヶ洞岩野	033	深鉢	底部	白色砂粒	明茶褐色	明茶褐色	概ね良好	縄文時代		
6	3-6	牧ヶ洞岩野	033	深鉢	底部	粗砂粒	黒褐色	黒褐色	やや不良	縄文時代		
7	3-7	牧ヶ洞岩野	033	深鉢	底部	粗砂粒多	黒褐色	黒褐色	やや不良	縄文時代		
8	3-8	牧ヶ洞岩野	033	深鉢	胴部	白色砂粒多	明茶褐色	明茶褐色	良好	縄文時代		2点を接合する。
9	3-9	牧ヶ洞岩野	033	深鉢	胴部	砂粒多	明褐色	明褐色	概ね良好	縄文時代		土器表面は剥落が激しい。
10	3-10	牧ヶ洞岩野	033	深鉢	胴部	白色砂粒多	明茶褐色	明茶褐色	良好	縄文時代		部分的に接合する。
11	3-11	二ツ塚	006	深鉢	胴部	砂粒多い	茶褐色	明褐色	概ね良好	縄文時代中期		
12	3-12	二ツ塚	006		肩部	長石多い	明褐色	明茶褐色	概ね良好	縄文時代前期?		
13	3-13	二ツ塚	006	深鉢	口縁部直下	砂粒多い	明褐色	明灰褐色	概ね良好	縄文時代		
14	3-14	二ツ塚	009	深鉢	胴部	砂粒多	茶褐色	茶褐色	良好	縄文時代中期		有
15	3-15	二ツ塚	009		胴部	細砂粒	茶褐色	茶褐色	良好			
16	3-16	二ツ塚	009		胴部	粗い砂粒多	茶褐色	明褐色	良好			
17	3-17	二ツ塚	009		胴部	砂粒多	明灰褐色	明灰褐色	良好			表面は摩耗。
18	3-18	二ツ塚	009		胴部	白色砂粒	灰褐色	灰褐色	良好			墨書注記「古井農林南」。
19	3-19	二ツ塚	009		底部	細砂粒	茶褐色	明褐色	良好			網代痕あり。
20	3-20	二ツ塚	009		胴部	細砂粒、石英粒	明茶褐色	明茶褐色	良好			
21	3-21	二ツ塚	009	深鉢	口縁部	砂粒(石英)	茶褐色	茶褐色	良好	縄文時代		有
22	3-22	二ツ塚	009	深鉢	口縁部	砂粒多	明茶褐色	明茶褐色	概ね良好			
23	3-23	二ツ塚	009				明褐色	明褐色	良好	弥生時代		
24	3-24	二ツ塚	009			黒色砂粒	明褐色	明褐色	良好	弥生時代		
25	3-25	二ツ塚	009		口縁部	細砂粒	明灰褐色	明灰褐色	良好	古墳時代		
26	3-26	二ツ塚	009		底部	砂粒多	明褐色	黒褐色	良好			
27	3-27	二ツ塚	009		底部	砂粒多	明茶褐色	茶褐色	良好			
28	4-1	二ツ塚	009		底部	黒色粒、長石	暗灰褐色	明褐色	良好	弥生時代		
29	4-2	二ツ塚	009		底部	長石	灰褐色	黒褐色	良好			
30	4-3	二ツ塚	010	深鉢	胴部	砂粒多	明褐色	明褐色	良好	縄文時代		有
31	4-4	二ツ塚	010	深鉢	胴部	長石多	灰褐色	明褐色	良好	縄文時代		
32	4-5	二ツ塚	010		口縁部	長石、雲母	暗灰褐色	暗灰褐色	良好			
33	4-6	二ツ塚	010	深鉢	口縁部直下		明灰褐色	明灰褐色	良好	縄文時代中期		
34	4-7	二ツ塚	010	深鉢	胴部	砂粒多、雲母	暗灰褐色	褐色	良好	縄文時代		
35	4-8	二ツ塚	014	深鉢	口縁部	細砂粒	灰褐色	灰褐色	良好	縄文時代中期		
36	4-9	二ツ塚	014	深鉢	口縁部	長石	暗褐色	褐色	良好	縄文時代中期	中富・神明式	
37	4-10	二ツ塚	014	深鉢	胴部	砂粒	褐色	褐色	良好	縄文時代		
38	4-11	二ツ塚	014	深鉢	口縁部	砂粒多	灰褐色	灰褐色	良好	縄文時代		
39	4-12	二ツ塚	014	深鉢	口縁部	細砂粒	暗灰褐色	暗灰褐色	良好	縄文時代		
40	4-13	二ツ塚	014	深鉢	胴部	細砂粒、繊維	暗褐色	暗褐色	良好	縄文時代中期	加曾利E式	
41	4-14	二ツ塚	015	深鉢	口縁部	長石	暗灰褐色	暗灰褐色	良好	縄文時代		
42	4-15	二ツ塚	015	深鉢	口縁部	砂粒多	明褐色	明褐色	良好	縄文時代		

表4 土器一覽表②

43	4-16	ニツ塚	015	深鉢	胴部	砂粒多、長石	暗灰褐色	茶褐色	良好	縄文時代		
44	4-17	ニツ塚	015	深鉢	胴部	長石多	暗灰褐色	暗灰褐色	良好	縄文時代		表面はやや摩耗。
45	4-18	ニツ塚	015	深鉢	胴部	細砂粒多、長石	明茶褐色	暗灰褐色	良好	縄文時代中期		
46	4-19	ニツ塚	015	深鉢	口縁部	細砂粒	明茶褐色	褐色	良好	縄文時代中期		
47	4-20	ニツ塚	015	深鉢	胴部	砂粒多	明灰褐色	明灰褐色	良好	縄文時代		
48	4-21	ニツ塚	015	深鉢	口縁部	わずかに白色砂粒	明灰褐色	明灰褐色	概ね良好			
49	4-22	ニツ塚	015	深鉢	口縁部	白色砂粒多	明褐色	明褐色	やや不良	縄文時代		
50	4-23	ニツ塚	046	深鉢	口縁部	白色砂粒	明灰褐色	明茶褐色	概ね良好	縄文時代中期		
51	4-24	ニツ塚	046	深鉢	口縁部	砂粒多	茶褐色	灰褐色	概ね良好	縄文時代		
52	4-25	ニツ塚	046	深鉢	口縁部	わずかに細砂粒	明灰褐色	明灰褐色	良好	縄文時代中期		
53	4-26	ニツ塚	046	深鉢	口縁部	砂粒多、雲母	暗灰褐色	明灰褐色	良好	縄文時代		
54	4-27	ニツ塚	046	深鉢	口縁部	白色砂粒多	暗灰褐色	灰褐色	概ね良好	縄文時代		有
55	4-28	ニツ塚	046		口縁部	砂粒中に小石	明茶褐色	明灰褐色	概ね良好	縄文時代		
56	4-29	ニツ塚	046		口縁部	砂粒含む	明茶褐色	明茶褐色	やや不良	縄文時代		
57	4-30	ニツ塚	047	深鉢	胴部	砂粒多	明灰色	明灰色	良好	縄文時代中期	中富・神明式	
58	4-31	ニツ塚	046	深鉢	口縁部	細砂粒多	明茶褐色	茶褐色	やや不良	縄文時代		
59	4-32	ニツ塚	047	深鉢	口縁部	細砂粒多	明褐色	明褐色	良好	縄文時代		有
60	4-33	ニツ塚	047	深鉢	口縁部～胴部	砂粒、雲母	明褐色	暗灰褐色	良好	縄文時代		
61	4-34	ニツ塚	047	深鉢	口縁部	白色砂粒多	灰褐色	灰褐色	概ね良好	縄文時代		
62	4-35	ニツ塚	048	深鉢	口縁部	細砂粒	暗褐色	茶褐色	良好	縄文時代		
63	4-36	ニツ塚	048	深鉢	口縁部	砂粒、小石	明茶褐色	明茶褐色	良好	縄文時代		
64	4-37	ニツ塚	048	深鉢	胴部	白色砂粒	灰褐色	灰褐色	概ね良好	縄文時代		
65	4-38	ニツ塚	048	深鉢	口縁部	白色砂粒、長石	褐色	褐色	概ね良好	縄文時代		折り返し口縁。
66	4-39	ニツ塚	048	甕?	口縁部		明褐色	明褐色	良好			
67	4-40	ニツ塚	048	深鉢	胴部	砂粒多	茶褐色	茶褐色	良好			
68	4-41	下古井石坂	044	深鉢	胴部	白色砂粒、長石	明褐色	明褐色	良好	縄文時代		
69	4-42	下古井石坂	044	深鉢	口縁部	砂粒多	明褐色	明褐色	良好	縄文時代		有
70	4-43	下古井石坂	044	深鉢	底部	白色砂粒多	褐色	褐色	良好			注記「古井農林」
71	4-44	下古井石坂	044	深鉢	底部		明褐色	茶褐色	良好	縄文時代		注記「賀茂郡 下古井□□新開地発見」
72	4-45	下古井石坂	044		底部	砂粒多	茶褐色	茶褐色	良好			注記「古井農林 蚕堂」
73	5-1	下古井石坂	003	深鉢	胴部	長石等	暗灰褐色	明茶褐色	良好	縄文時代		有 墨書注記「古井農林」
74	5-2	下古井石坂	003		口縁部	長石	明茶褐色	明茶褐色	一部不良	縄文時代		
75	5-3	下古井石坂	003		胴部	砂粒多い	茶褐色	灰褐色	良好	縄文時代		注記「古井農林ノ南」
76	5-4	下古井石坂	003	深鉢	口縁部直下	石英	褐色	茶褐色	良好	縄文時代中期		
77	5-5	下古井石坂	003	深鉢	口縁部	砂粒含む	明褐色	明褐色	やや不良	縄文時代中期	中富神明式	
78	5-6	下古井石坂	003		口縁部	石英多い	褐色	明茶褐色	概ね良好	縄文時代		
79	5-7	下古井石坂	003		口縁部	細砂粒(長石?)、雲母	暗褐色		概ね良好	縄文時代中期		
80	5-8	下古井石坂	003	深鉢	口縁部	長石、雲母	暗褐色	明褐色	良好	縄文時代		
81	5-9	下古井石坂	003	深鉢	底部	砂粒	明褐色	明褐色	良好	縄文時代		
82	5-10	下古井八坂近傍	007	深鉢	口縁部	砂粒含む、石英、黒色粒	茶褐色	暗褐色	良好	縄文時代中期		
83	5-11	下古井八坂近傍	007	深鉢	胴部	白色砂粒多	茶褐色	茶褐色	良好	縄文時代中期		
84	5-12	下古井八坂近傍	007	深鉢	胴部	白色砂粒(長石)多	暗灰褐色	明茶褐色	良好	縄文時代		
85	5-13	下古井八坂近傍	007	深鉢	胴部	砂粒多	暗灰褐色	明灰褐色	良好	縄文時代中期		



表5 土器一覧表③

86	5-14	下古井八坂近傍	007	深鉢	胴部	砂粒少	茶褐色	茶褐色	良好	縄文時代		RL	注記「上古井農林ノ南 地下一尺位ニテ発見ス 下五六□□□ハ黄色土ナリ」
87	5-15	下古井八坂近傍	007		口縁部	砂粒多	暗灰褐色	明茶褐色	良好	縄文時代		有	
88	5-16	下古井八坂近傍	007	深鉢	口縁部	細砂粒、石英	暗灰褐色	明茶褐色	良好	縄文時代中期			
89	5-17	下古井八坂近傍	007	深鉢	胴部		暗褐色	明褐色	良好	縄文時代		有	3点を接合する。
90	5-18	下古井八坂近傍	007	甕	胴部	細砂粒	明茶褐色	明茶褐色	良好	弥生時代			
91	5-19	下古井八坂近傍	007	甕	胴部	砂粒、黒色粒	明茶褐色	明茶褐色	良好	縄文時代			
92	5-20	下古井八坂近傍	007	深鉢	底部	白色砂粒(長石等)、雲母	明茶褐色	暗灰褐色	良好				注記「上古井石坂近傍」
93	5-21	塩屋	059	深鉢	口縁部	砂粒多	明褐色	明褐色	良好	縄文中期			
94	5-22	塩屋	059	深鉢	口縁部	砂粒多、わずかに雲母	暗褐色	明茶褐色	良好	縄文中期			
95	5-23	塩屋	059	深鉢	口縁部	砂粒多、石英	明茶褐色	明茶褐色	良好	縄文中期			
96	5-24	塩屋	059	深鉢	胴部	白色砂粒	明褐色	暗灰褐色	良好	縄文中期		有	
97	5-25	塩屋	059	深鉢	胴部	白色砂粒少量、雲母	褐色	灰褐色	良好	縄文中期		有	
98	5-26	阿曾布村石神	038	深鉢	口縁部	白色砂粒多	明褐色	暗灰褐色	良好	縄文時代中期	中富・神明式		
99	5-27	阿曾布村石神	038	深鉢	口縁部直下?	砂粒含	明灰褐色	暗灰褐色	良好	縄文時代			
100	5-28	郡立郡東村曾師里	032		口縁部		灰褐色	灰褐色	良好	古墳時代?			須恵器。
101	5-29	郡立郡東村曾師里	032	深鉢	胴部	砂粒多	褐色	褐色	概ね良好				表面摩耗。
102	5-30	郡立郡東村曾師里	032	深鉢?	胴部	白色砂粒多	明茶褐色	明茶褐色	良好				表面は著しく摩耗。
103	5-31	小坂町字落合	039	深鉢	胴部	砂粒多	明褐色	暗灰褐色	良好	縄文時代			
104	5-32	小坂町字落合	039	深鉢	胴部	細砂粒多	明褐色	褐色	良好	縄文時代			
105	5-33	小坂町字落合	039	深鉢	胴部	細砂粒	明褐色	明茶褐色	良好	縄文時代			
106	5-34	小坂町字落合	039	深鉢	胴部		暗茶褐色	明茶褐色	良好	縄文時代			
107	5-35	小坂町字落合	039	深鉢	口縁部	黒色細砂粒多	明茶褐色	明茶褐色	良好	縄文時代			
108	5-36	小坂町字落合	039	深鉢	胴部	砂粒少量	明褐色	暗褐色	良好	縄文時代			
109	5-37	小坂町字落合	039	深鉢	底部	白色砂粒(晶石)、雲母	茶褐色	褐色	良好				
110	5-38	小坂町字落合	039	深鉢	胴部	細砂粒(長石)	黒褐色	褐色	良好	縄文時代			
111	5-39	小坂町字落合	039	深鉢	胴部		明茶褐色	明茶褐色	良好	縄文時代			
112	5-40	小坂町字落合	039	深鉢	胴部	細砂粒多	明茶褐色	暗灰褐色	良好	縄文時代			
113	5-41	小坂町字落合	039	深鉢	胴部	白色砂粒多	明茶褐色	明茶褐色	良好	縄文時代		有	
114	5-42	小坂町字落合	039	深鉢	胴部	砂粒含	茶褐色	明茶褐色	良好	縄文時代		有	
115	6-1	西上田	036	深鉢	口縁部直下	白色砂粒(長石)	暗灰褐色	明灰褐色	良好	縄文時代中期	古府式		
116	6-2	西上田	036		口縁部	砂粒多	明褐色	暗灰褐色	良好	縄文時代中期	勝坂式		
117	6-3	西上田	036	深鉢	胴部	白色砂粒(長石)	暗灰褐色	明褐色	良好	縄文時代中期		有	
118	6-4	西上田	036	深鉢	胴部	長石、石英等	灰褐色	明褐色	良好	縄文時代		有	
119	6-5	坂祝村芦渡	001	深鉢	胴部	砂粒多、雲母	暗灰褐色	暗褐色	良好	縄文時代中期	加曾利E式	LR	沈線のヘリの粘土が盛り上がる。
120	6-6	坂祝村芦渡	001	深鉢	胴部	砂粒	暗灰色	明褐色	良好	縄文時代中期?	曾利式		
121	6-7	坂祝村芦渡	001	深鉢	胴部	砂粒、長石	暗褐色	暗灰色	良好	縄文時代中期	曾利式		外面は土器表面の欠落が激しい。
122	6-8	坂祝村芦渡	001	深鉢	口縁部直下	砂粒	明褐色	明褐色	良好	縄文			
123	6-9	坂祝村芦渡	002	深鉢	胴部	細砂粒(長石)、雲母	茶褐色	褐色	良好	縄文時代中期	曾利式		
124	6-10	坂祝村芦渡	002	深鉢	口縁部直下	砂粒多い(長石)	明褐色	明灰褐色	やや不良	縄文時代中期			
125	6-11	坂祝村芦渡	002	深鉢	胴部	細砂粒、雲母	暗褐色	暗灰褐色	良好	縄文時代中期			無紋。底部付近か?
126	6-12	坂祝村芦渡	002	深鉢	胴部	砂粒多	暗灰褐色	明灰褐色	良好	縄文時代中期			
127	6-13	坂祝村芦渡	002	深鉢		石英・長石	明褐色	明褐色	概ね良好				表面の大半はガジリ。
128	6-14	坂祝村芦渡	001	深鉢	口縁部	砂粒多、チャート	明茶褐色	明茶褐色	やや不良	縄文時代中期			

表6 土器一覧表④

129	6-15	坂祝村芦渡	001	深鉢	口縁部	白色細砂粒	明褐色	明褐色	良好	縄文時代中期		
130	6-16	坂祝村芦渡	001	深鉢	底部	細砂粒	明茶褐色	明茶褐色	良好	縄文		網代痕あり。
131	6-17	坂祝村芦渡	001		口縁部把手?	長石類多	明褐色	明褐色	良好	縄文時代中期		
132	6-18	坂祝村芦渡	001		底部	白色砂粒(長石)	灰褐色	灰褐色	良好	縄文時代		
133	6-19	和知村牧野嶋崎	011	深鉢	胴部	砂粒	暗褐色	暗褐色	良好	縄文時代		
134	6-20	和知村牧野嶋崎	011	深鉢	胴部		明茶褐色	明灰褐色	良好	縄文時代		
135	6-21	和知村牧野嶋崎	011	深鉢	胴部	白色砂粒微量	明灰褐色	明灰褐色	良好	縄文時代		
136	6-22	西志賀	053	高坏?	口縁部	わずかに雲母	灰色	明褐色	良好	弥生時代		
137	6-23	西志賀	053	壺	肩部	砂粒、一部黒色	明灰色	明灰色	良好	弥生時代		
138	6-24	西志賀	053		胴部	砂粒わずか	灰褐色	明灰色	良好	弥生時代		
139	6-25	西志賀	053	壺	肩部	砂粒少	灰色	明灰色	良好	弥生時代		
140	6-26	西志賀	053	鉢	口縁部		明灰色	明灰色	良好			
141	6-27	西志賀	053	蓋	辺縁	やや粒の大きい砂粒少量	明灰色	暗灰色	良好	弥生時代		
142	6-28	西志賀	053	壺	胴部	砂粒多	黒色	明灰色	良好	弥生時代		
143	7-1	丹羽郡千秋村	056	壺	口縁部		灰色	灰色	良好	弥生時代		有?
144	7-2	丹羽郡千秋村	056	壺	胴部		明茶褐色	明茶褐色	良好	弥生時代		2点が接合する。
145	7-2	丹羽郡千秋村	056	壺	胴部		明茶褐色	明茶褐色	良好	弥生時代		2点が接合する。
146	7-3	丹羽郡千秋村	056		胴部		明茶褐色	明褐色	良好			
147	7-4	馬見塚	050	高坏	脚部	雲母含む細砂粒	明褐色	明褐色	概ね良好	弥生		注記「西成村 □□西」
148	7-5	馬見塚	050	深鉢?	底部	細砂粒	明茶褐色	明茶褐色	やや不良			
149	7-6	馬見塚	050	壺	底部~胴部	雲母含む	明茶褐色	明茶褐色	良好			
150	7-7	馬見塚	050	甕?		石英・長石	黒色		良好			注記「西成村馬見塚三□田」
151	7-8	原之辻	057	壺	底部~胴部		明褐色	黒褐色	良好			注記「老岐原ノ辻 ハルノ 石器時代遺跡」
152	7-9	原之辻	058	壺	底部	底部に砂粒集中	明灰褐色	明灰色	良好			注記「老岐 田河村 原ノ辻」
153	7-10	加良香美山	058		胴部	白色砂粒多い	明褐色	明褐色	良好			注記「一九三〇 三、二十六 老岐カラカミ山貝塚 鏡出土」
154	7-11	加良香美山	058	甕	胴部		明褐色	明褐色	良好			注記：土器表面「老岐加良加美山貝塚一九三〇.三.二六」、土器内面「甕棺型土器一片」
155	7-12	田浦	055	壺	胴部		明褐色	明灰褐色	良好			内面墨書注記「田浦貝塚」
156	7-13	田浦	055	甕	口縁部	砂粒なし	褐色	明褐色	良好			注記「田浦貝塚」
157	7-14	田浦	057	壺	口縁部		明褐色	明褐色	良好			注記「田浦」
158	7-15	田浦	055	甕	口縁部~胴部	砂粒多	茶褐色	明茶褐色	良好			注記「昭和四年八月二十八日 田浦貝塚」

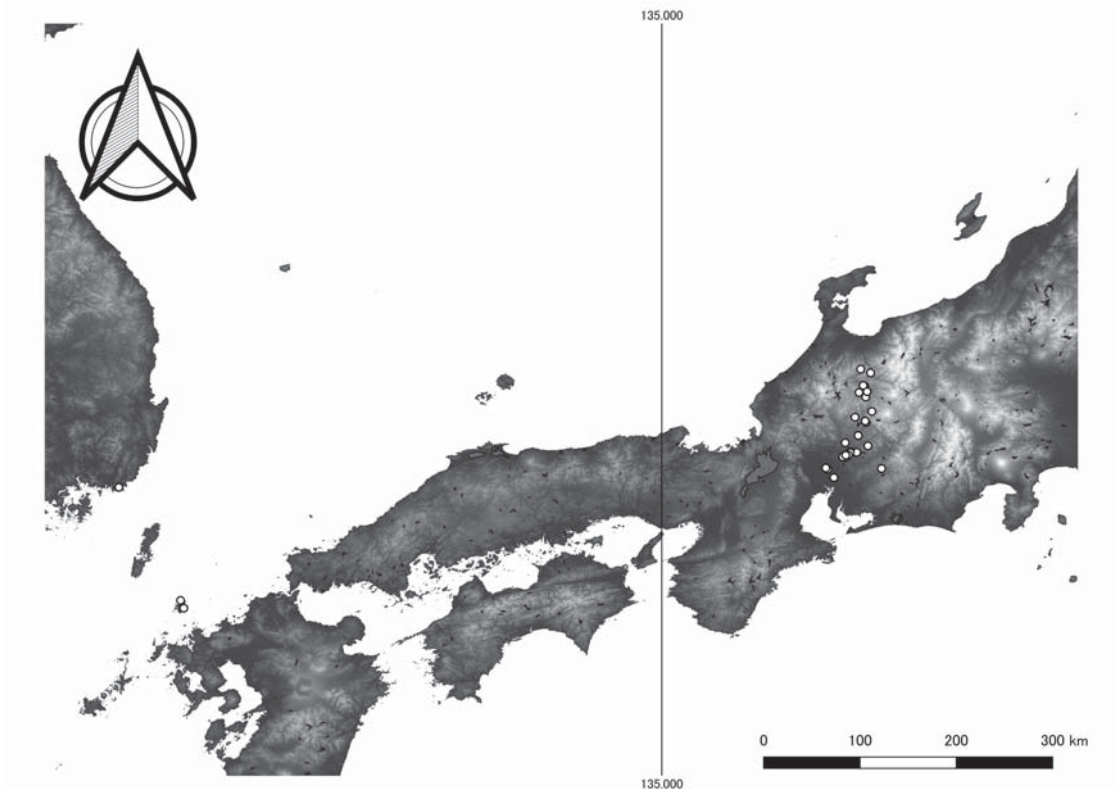


図1 林魁一コレクション広域分布図

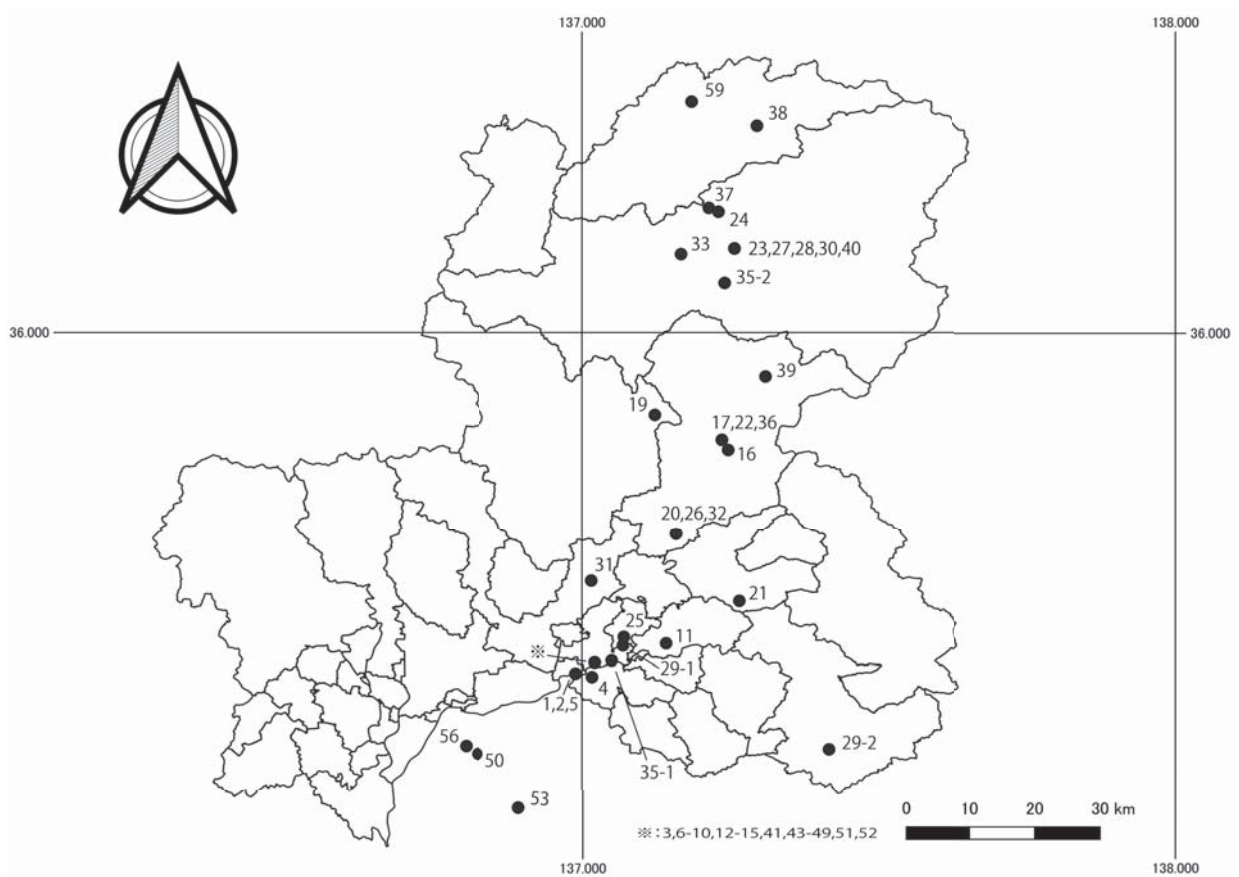


図2 林魁一コレクション岐阜県周辺分布図 (数字は箱番号)

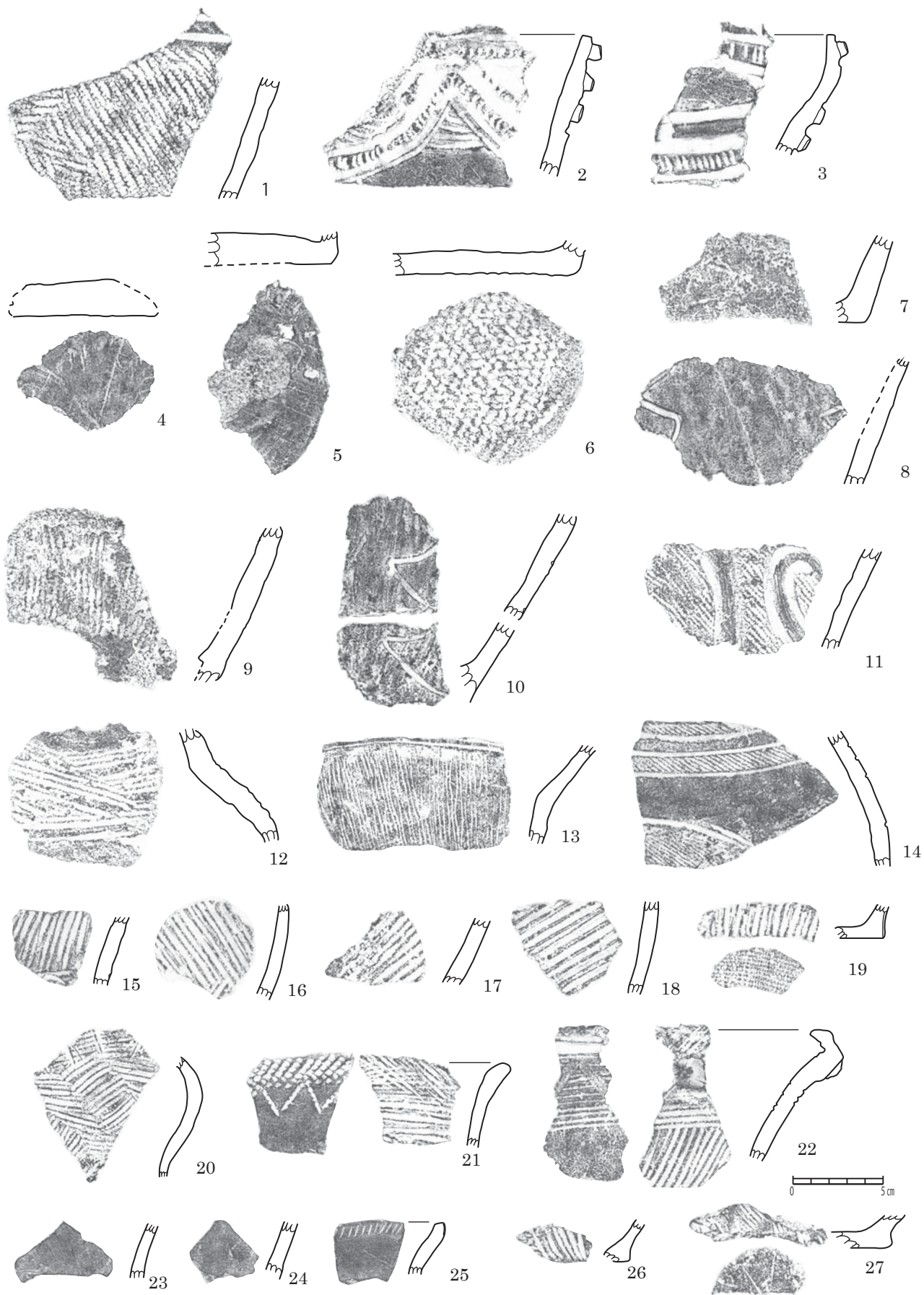


图3 拓本·实测图①

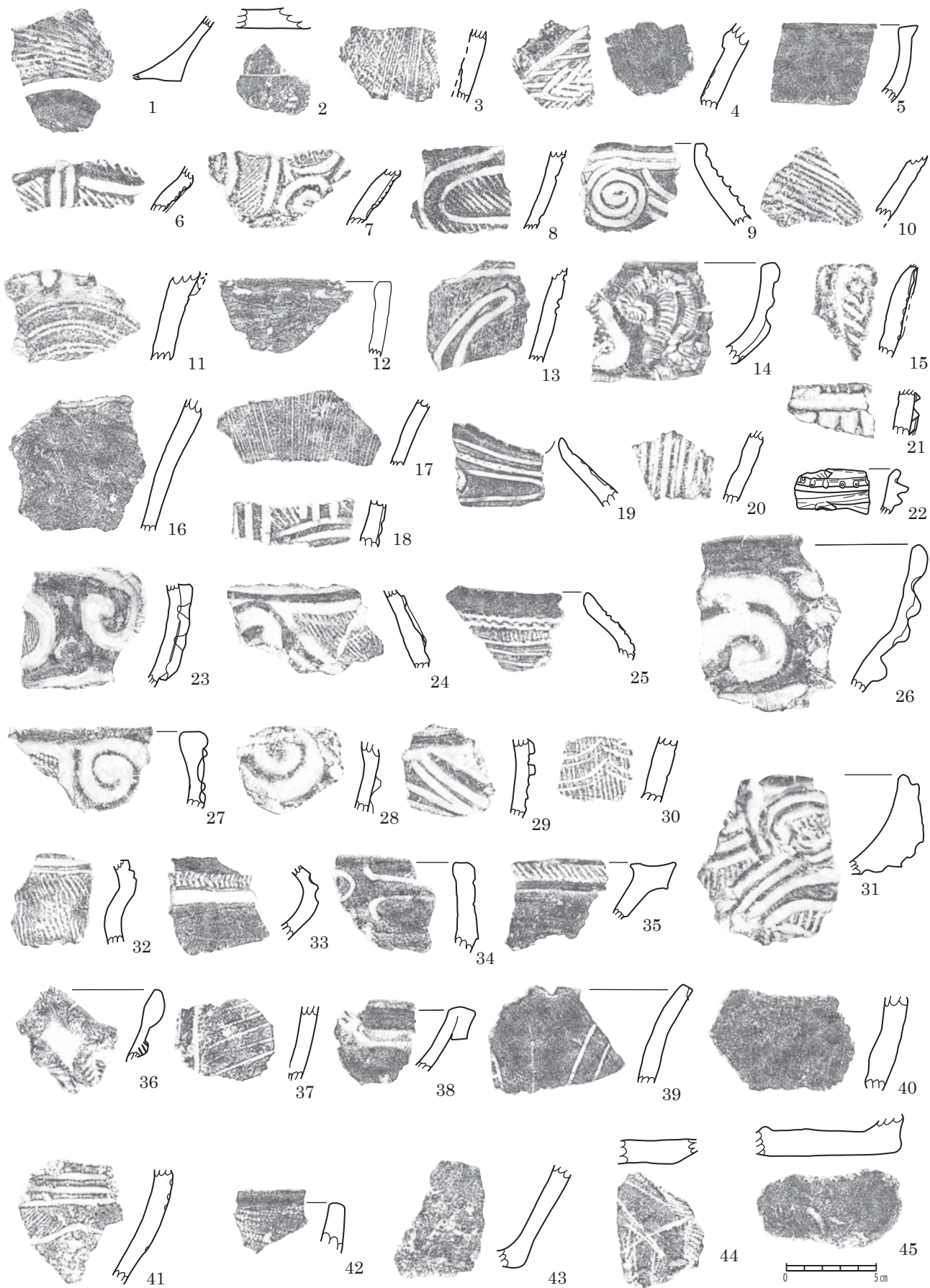


图4 拓本·实测图②



图5 拓本·实测图③

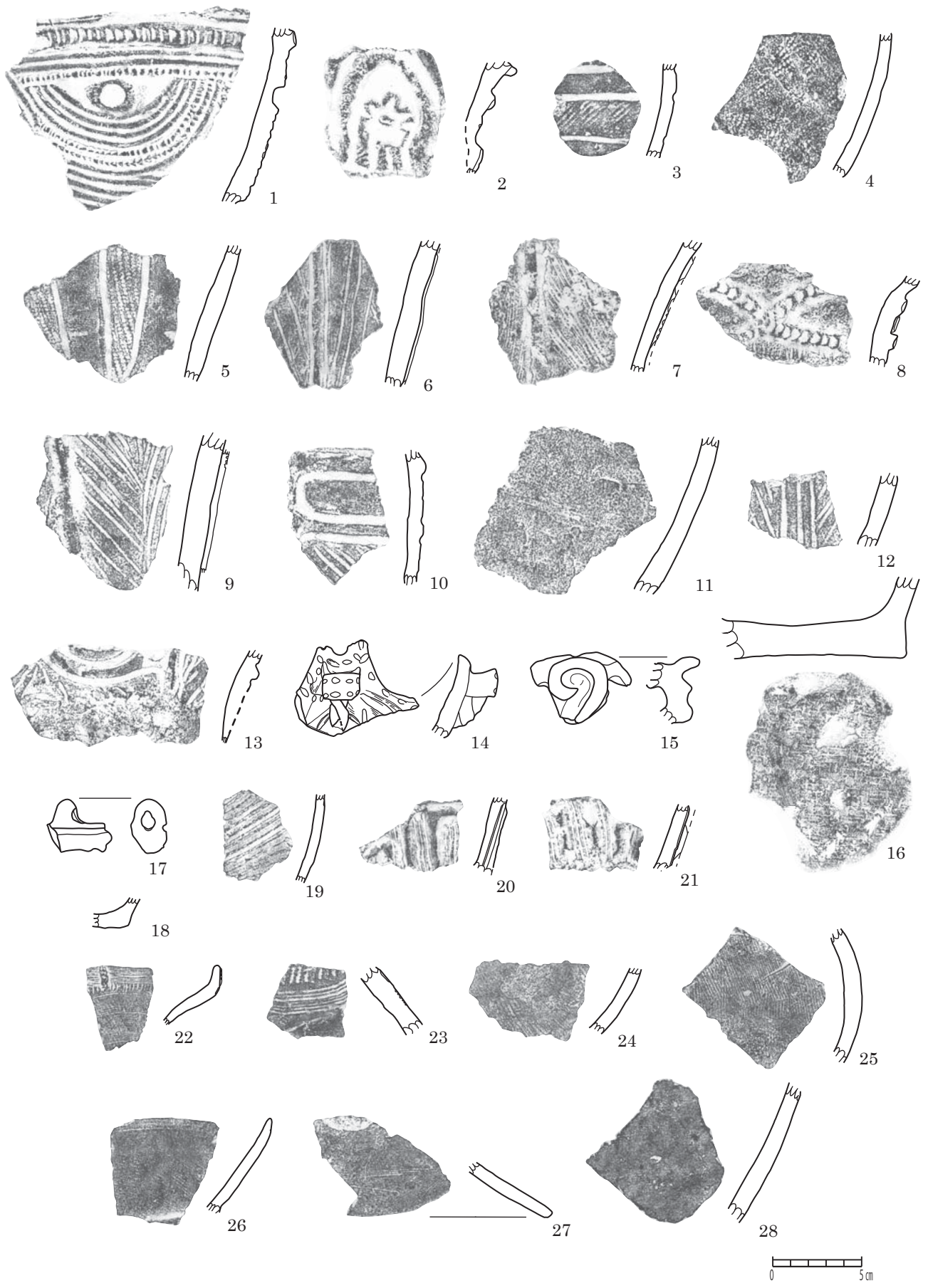


图6 拓本·实测图④

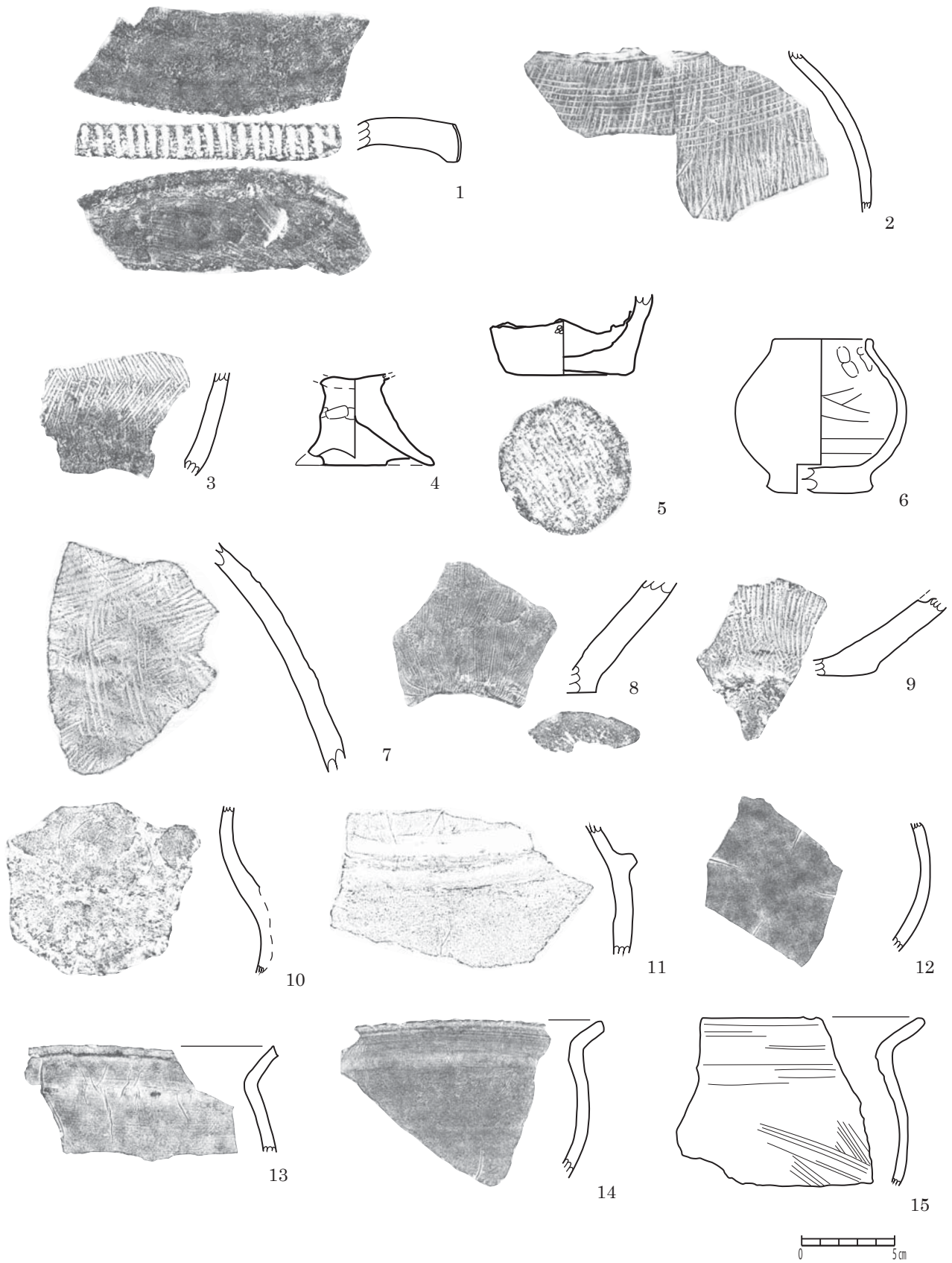


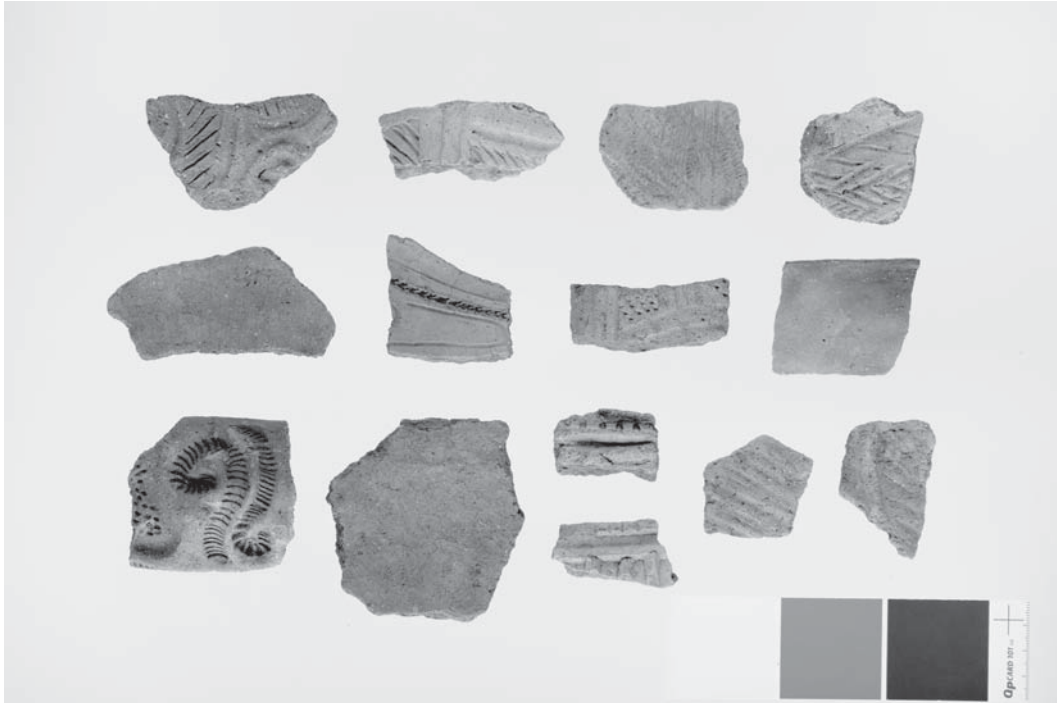
图7 拓本·实测图⑤







1 縄文土器



2 縄文土器

写真図版 2



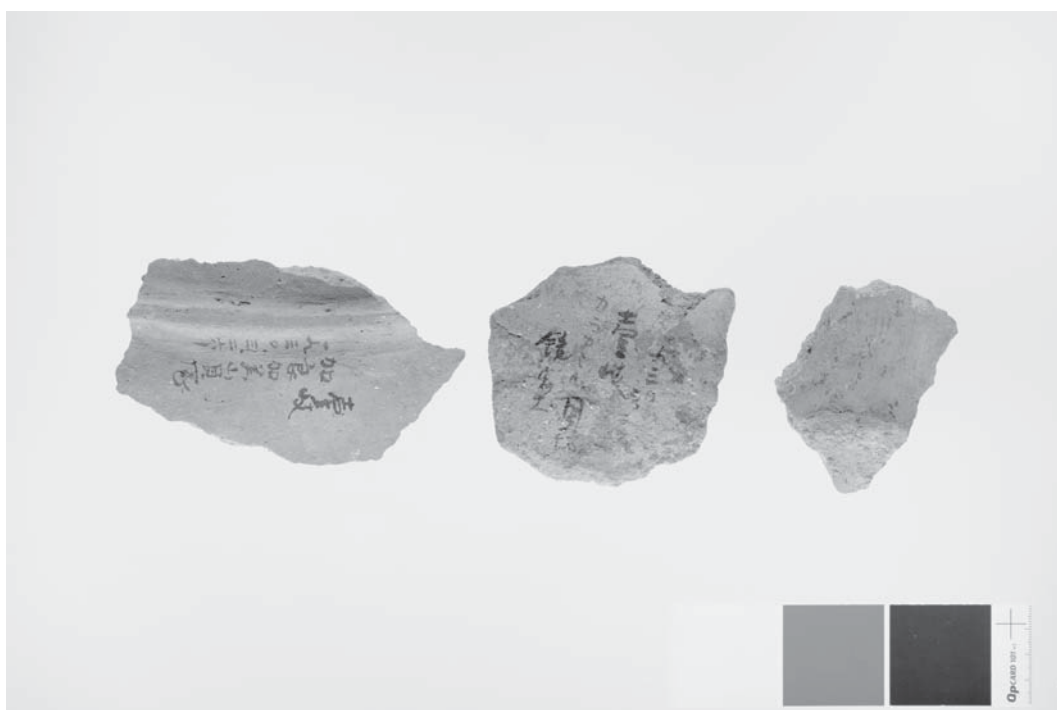
1 縄文土器



2 縄文土器

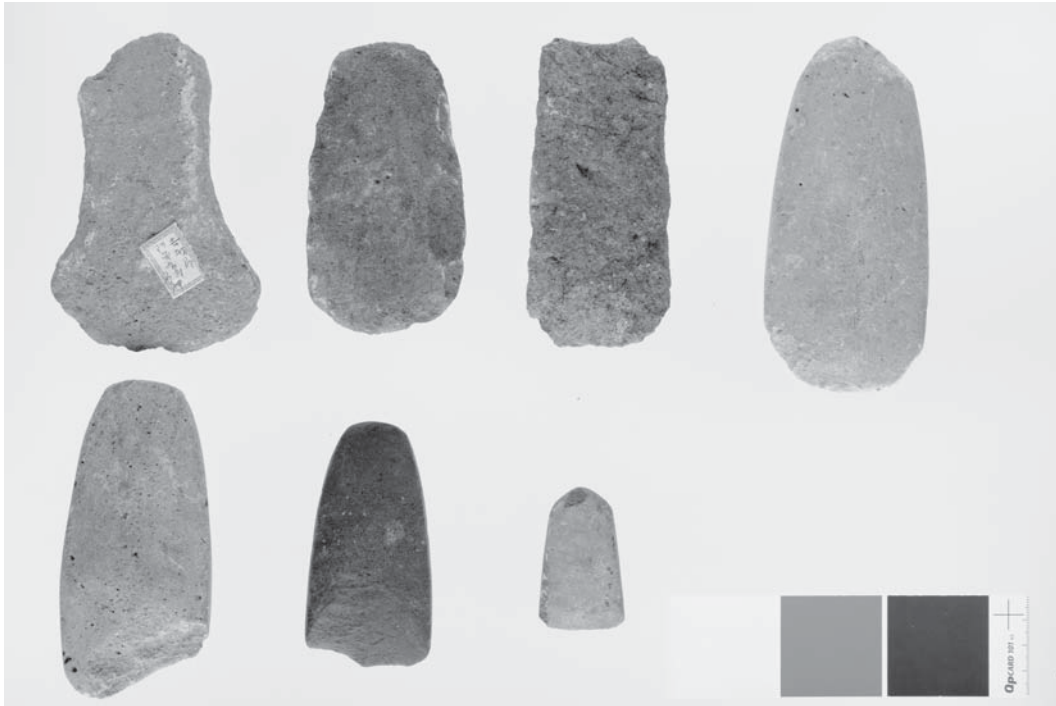


1 縄文土器

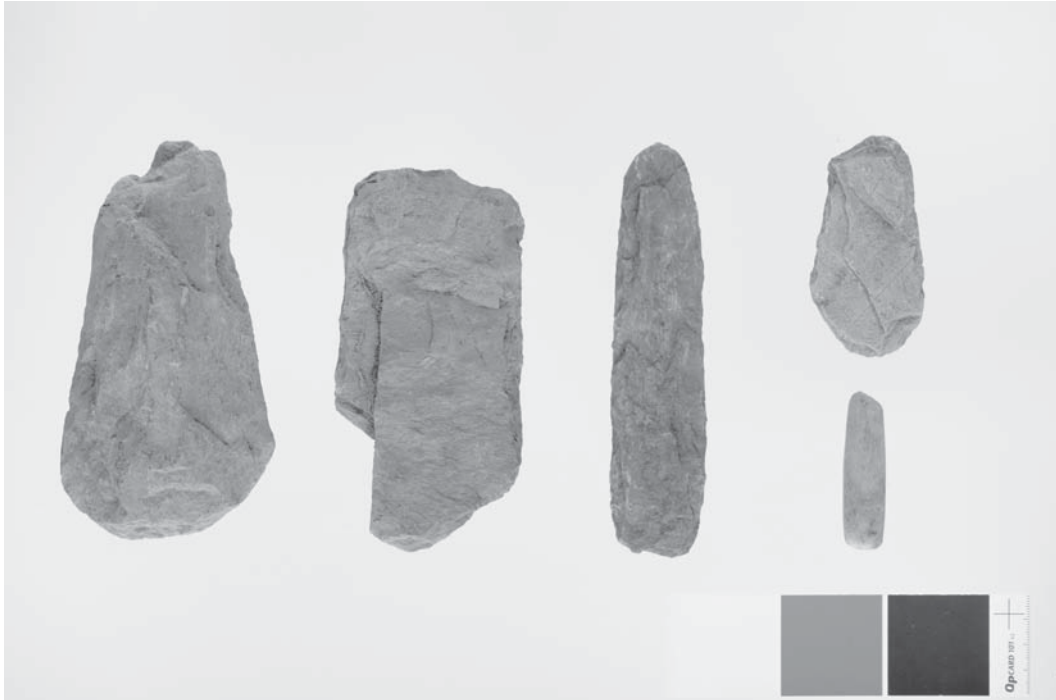


2 弥生土器

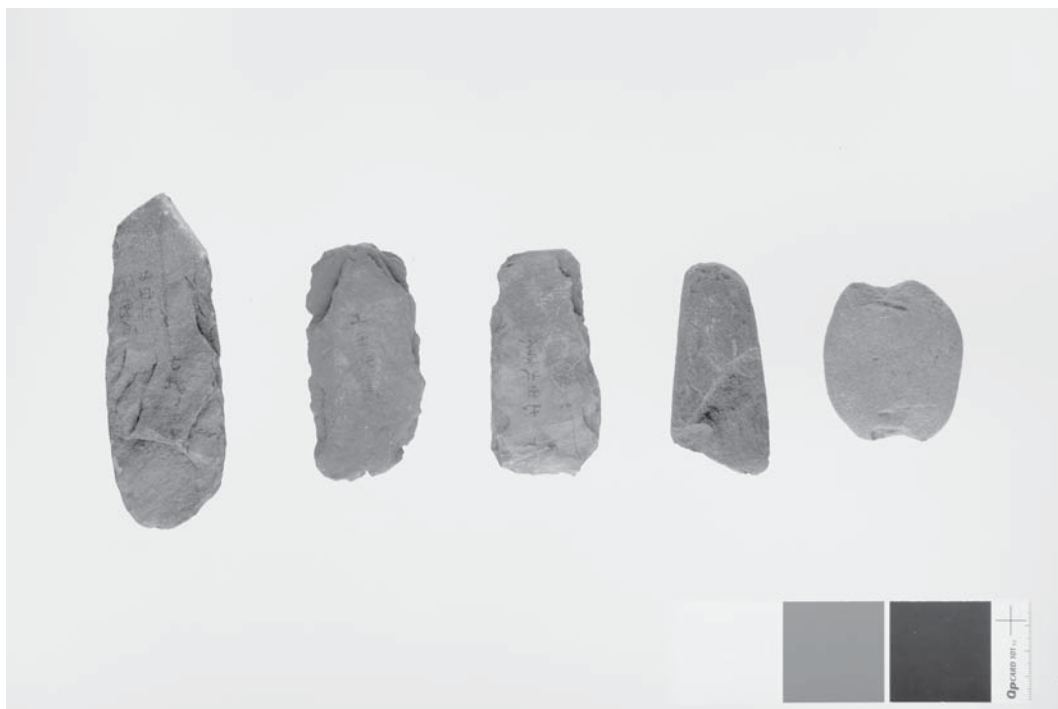
写真図版 4



1 石斧



2 石斧



1 礫石器



2 剥片石器



1 剥片石器



2 金属器

## **“HAYASHI Kaichi Collection” of Nanzan University Museum of Anthropology (1) — Pottery**

YUYA Hidetoshi, OKA Tomoyasu & HATA Yurika

This paper gives an introduction of the archaeological collection of Mr. HAYASHI Kaichi, an archaeologist based on Gifu Prefecture, which was donated in 1950, along with a report of some potteries in the same collection. The collection counts 482 items in total, that is, 158 of potteries, 307 of stone tools, and also 17 of other materials (metalware and antler tools, etc.). Those materials are put inside black paper boxes revealing each collecting area, and the boxes are basically divided into two parts: pottery and stone tool. Most of those materials reported in this paper (potteries shown with figures and photos) came from Gifu Prefecture where Mr. HAYASHI was mainly active, a few from Aichi and Fukuoka Prefectures, also including those from Korean Peninsula. Many of them are from the Jōmon period, and there are quite few from the Kofun period. All potteries here made in the Jōmon period were collected in Gifu Prefecture; some are unique in the Kiso River area, and others reveal some strong influence from other parts. These include materials Mr. HAYASHI presented in his own article.



# 南山大学人類学博物館が所蔵するマコンデ彫刻について

井原瑠梨

## はじめに

南山大学人類学博物館には、2015年度に故・西江雅之氏によって収集された、900点以上もの世界各地の民族誌資料が寄贈された（以下、西江コレクションと称する）。言語学・文化人類学者である西江氏は主に東アフリカ、カリブ海域、インド洋諸島で言語と文化の研究に従事し、東京外国語大学、東京大学、早稲田大学、東京芸術大学などで教鞭をとった。本コレクションは、大まかにアフリカ、パプアニューギニア、アンデス地域などの資料のほか、動物のはく製など、多岐にわたる資料によって構成されている。西江氏本人と南山大学の間には何の関係もないが、このコレクションの寄贈と受け入れにあたっては、西江氏に教えを受けた加原奈穂子氏に仲介の労をとっていただいた。ところでその中には、タンザニアを中心としている「マコンデ彫刻」が数点含まれている。本稿ではマコンデ彫刻の概要と、西江コレクションのマコンデ彫刻の様式・造形について報告する。

## 1. マコンデ彫刻の概要

### (1) マコンデ族と彫刻

マコンデ彫刻とは、東アフリカのタンザニアとモザンビークの国境付近に広がる海拔500～800mのマコンデ高原に暮らすマコンデ族によって作られた彫刻のことである。現在はタンザニアにおける代表的なアート<sup>(1)</sup>のひとつとして知られている。

マコンデ族は農耕民族であり、その発祥はアフリカ大陸南西部のナイジェリアまたはカメルーン地方とされている。その後、彼らは東へ移動し、コンゴやザンビアを経てマコンデ高原に定住したバントゥー系の民族である（和田1977）。1885年のベルリン会議でヨーロッパ諸国が決めたアフリカ分割により、タンザニアはドイツ領に、モザンビークはポルトガル領にそれぞれ

植民地支配下に置かれることになり、ルブマ川を国境にマコンデ族は分断された（図1）。

マコンデ族は古くから儀礼に用いる仮面や守護神の像などの彫刻を行っており、木彫りの名人として知られていた。1920年代に、モザンビークのマコンデ族の居住地で布教活動を行っていたポルトガル人宣教師が、マコンデ族の彫刻技術に注目し、伝統宗教から改宗させるためという名目のもと、マコンデ族にマリア像などのキリスト教に関連する彫刻を作らせた。また、宣教師は彫刻材にアフリカンブラックウッドを使用するように指導した。アフリカンブラックウッドは高級木材として知られており、非常に硬く彫刻は難しいが、その分耐久性が高く、長く保存できるという利点があり、アフリカンブラックウッドを使用した彫刻の商品価値が高まった。製作した彫刻は教会などに売り出され、商品として生産されるようになった。

マコンデ彫刻の製作は、モザンビーク国内で始められたが、その後、ポルトガルによる植民地支配の激化や居住地に軍用道路が建設されたことが発端となり、モザンビーク国内での居住が困難となったマコンデ族の多くがルブマ川を渡ってタンザニア側へ移住した。タンザニア政府は当時の首都ダルエスサラーム郊外にマコンデ族の難民キャンプを建設した。マコンデ族彫刻師は移住先のタンザニア国内でも彫刻製作を続けていた。その後アフリカ美術品の収集のためにタンザニアを訪れていた欧米の骨董商やコレクターらの間でマコンデ彫刻の存在が知られていった。

1953年になると、ダルエスサラームにマコンデ彫刻の工房と販売所を兼ねた施設が作られ、マコンデ彫刻の生産量が大幅に増加した。この工房では、マコンデ族以外の彫刻師も彫刻業に従事していたという記録が残っている（岩崎2012）。1964年に独立したタンザニアは、1960年代後半以降、国の文化のアピールのために、海外で開かれる展覧会などにマコンデ彫刻を出品するようになり、国内外でもその存在が知られ

るようになった。1970年に開かれた大阪万博のタンザニア館においてもマコンデ彫刻が紹介された。1980年代になると、タンザニアへの海外旅行客が急増し、マコンデ彫刻は土産物としての需要が高まった。

このような過程を経てマコンデ彫刻はタンザニアのアート、そしてタンザニアの土産物として知られるようになった。

### (2) マコンデ彫刻の材木

前述のとおり、マコンデ彫刻にはアフリカンブラックウッド(写真1)と呼ばれる高級木材が使用されている。なお、ポルトガル人宣教師によってアフリカンブラックウッドが導入される以前は、別の木材を使用して儀礼用の仮面などを制作していた。アフリカンブラックウッドは東アフリカ地域のタンザニアやモザンビークを主な山地とするマメ科の樹木である。アフリカンブラックウッドは心材部分と辺材部分の材質や色が異なる材木で、心材は黒色で比重が高く硬い材質で、マコンデ彫刻以外にも楽器や高級家具として使用されてきた。近年では良質材を求めた乱伐が進む傾向にあり資源の持続性が懸念されている。実際にアフリカンブラックウッドはレッドリストに準絶滅危惧種として登録、さらに2017年にはワシントン条約付属書Ⅱに掲載され商取引に制限が掛けられている木材である(仲井2018)。

木材が入手しづらくなってきたことによって1990年代頃から、アフリカンブラックウッド以外の木材を使用したマコンデ彫刻も増えてきている。別の木材を使用したマコンデ彫刻は靴墨などで黒く塗装されている。ダルエスサラームのとある販売所で販売されているマコンデ彫刻のうち、アフリカンブラックウッド製のマコンデ彫刻と他の木材を使用したマコンデ彫刻の割合が半々程度になっているという報告もある(白石2006)。

### (3) マコンデ彫刻の様式

マコンデ彫刻には、主な様式として①人像や動物などの写実的な彫刻、②ウジャマ彫刻、③シェタニ像、④抽象的な彫刻などがあり、先にも述べた通り、土産物としての需要が高まってからは上記の区分に当てはまらない様々な形の彫刻が生み出されている。

①の人像や動物などの写実的な彫刻は、人々の日常生活を描いた作品が多く、例えば、頭の上に水瓶を乗せて運ぶ人の姿や、太鼓を演奏する人の姿や、バナナの房を抱えている人の姿などがある。創成期の名残で、

キリスト教に関連する彫刻も多く製作されている。動物の彫刻作品は、タンザニアの主要観光である野生動物のサファリツアーをイメージしたもので、ゾウやキリンなどが多く製作されている。

②のウジャマ彫刻は、複数の人々が積み重なるようにして彫られたものである。ウジャマという言葉はスワヒリ語<sup>(2)</sup>で家族愛や家族の連携などを意味する言葉で、ウジャマ彫刻は家系図や家族が協力しあっている様子を描いたものが多い。

③シェタニとは、マコンデ族に古くから伝わる精霊や悪魔のことである。シェタニは人を助けることもすれば、悪さをする生き物として考えられている。シェタニ像はその姿を表現したものである。彫刻師は思い思いのシェタニの姿を作り出すため、シェタニ像の造形には決まったルールはなく、人のような姿をした作品もあれば、怪物のような姿をした作品など様々である。

④の抽象彫刻は、1977年にマコンデ彫刻家クレメンティ・マティによって考案された様式である(マコンデ美術館2003)。クレメンティ・マティはヨーロッパで開催されたアフリカ美術の展覧会に同行し、その旅先でヨーロッパの抽象的な現代アートを見て学び、帰国後にマコンデ彫刻にも抽象的な表現を取り入れ始めた。曲線や球体を多用した作品が多い。また、他の様式と比較して非常によく磨き上げられている傾向にある。

## 2. 南山大学人類学博物館のマコンデ彫刻

西江コレクションの総数は913点あり、そのうちマコンデ彫刻は10点以上ある。しかしマコンデ彫刻であるかどうか判断がつかない作品も多い。本稿では、マコンデ彫刻の中でも様式として確立されているウジャマ彫刻2点、シェタニ像1点、抽象彫刻3点の計6点を取り上げ、作品の観察結果を写真、実測図と合わせて報告する。

①ウジャマ彫刻(口絵1)(図2)

資料番号 NSM-411<sup>(3)</sup>

高さ505mm 幅180mm 奥行き110mm

このウジャマ彫刻には16人の人間が描かれている。上部の最も大きい人物は女性である。この人物の口元にはリッププラグと呼ばれる、マコンデ族の古い慣習の一つで、女性が上唇に穴を開けて着用する円盤状の

プラグが描かれている（写真2）。出産のたびにプラグを大きくし、大きなプラグをはめている女性は多産であることの象徴とされている。なお現在ではほとんど行われていない（マコンデ美術館2003）。周りの人間を観察してみると、バナナの房（写真3）やかごのようなものを抱えている人（写真4）、頭にヒョウタンを乗せている人（写真5）、腹部が膨らんだ妊婦と思しき人などがいる。この彫刻は家系図または収穫の様子を表していると考えられる。他の人々も、支えあったり、腕を引きあったりしている人や底部付近には中腰になっている人など様々な姿勢をした人が描かれている。みな上裸で腰巻を身につけている。また手足の指一本一本まで細かく彫刻されている。

### ②ウジャマ彫刻（口絵2）（図3）

資料番号 NSM-645

高さ 175mm 幅 98mm 奥行 85mm

このウジャマ彫刻には4人の人間が描かれている。膝立ちの姿勢の女性が一人と、その周囲に小さな人間が三人いる。小さな人間のうち手前にいる二人は網目のある袋のようなものを抱えている。四人とも指の表現が簡略化されており、親指のみが表現されている。この彫刻はアフリカンブラックウッドの辺材部分も使用しており、心材の黒色と辺材の乳白色のコントラストが明瞭である。マコンデ彫刻の中には、この作品のように辺材部分を活かした作品も作られている。大きいもので高さ2メートルを超えるウジャマ彫刻もある中、この彫刻は高さが17cmほどしかなく、ウジャマ彫刻の中では非常に小さい部類になる。

### ③シェタニ像（口絵3）（図4）

資料番号 NSM-46

高さ 270mm 幅 110mm 奥行 75mm

このシェタニ像にはシェタニと二人の人間が描かれている。シェタニは大きな口を開けて人間を啜えている。右手は口の中にある人間の両足をつかんでいる。またシェタニは下にいる人間の上半身を右足で踏みつぶし、左膝で腰を押さえつけ、左手でその人間の足を持ち上げ体をL字に曲げている。手足の指はそれぞれ三本ずつで、肩幅が広く、胸部は非常に細い。腹部は異様に膨らんでおり、そのまま下に垂れ下がっている。足元にいる人間が、垂れ下がった部位を下から両手で支えている。

このシェタニ像は、他のマコンデ彫刻と比較すると、かなり黒光りしており、木目が一切見られない。また大きさの割に軽いことからアフリカンブラックウッド製ではなく、別の木材に彫刻し、黒い塗料を塗って仕上げたものであると考えられる。

### ④抽象彫刻1（口絵4）（図5）

資料番号 NSM-845

高さ 618mm 幅 190mm 奥行 170mm

底部に「mwanjema」と刻まれており、マコンデ彫刻師 Mwanjema 氏により制作されたものであることがわかる。マコンデ美術館図録によると、Mwanjema 氏は曲線を多用した抽象的な彫刻を得意とする彫刻師で、複雑に入り組んだ曲線と、人間の体の一部を自由に想像して作品を数多く彫り出している（マコンデ美術館2003）。西江コレクションのマコンデ彫刻の中で、作家名が刻まれているのはこの作品のみで、他の作品には作家名は彫られていない。なお、作家名の刻印の有無は、作品がアート作品であるか土産物であるかという違いを示すものではない。この作品は目や鼻などの表現はなく、非常に抽象度が高い彫刻である。上部には等間隔に刻まれた部分があり、これは歯を表現していると考えられる。また足の親指と思われる部分が一部表現されている。土台がしっかりと作られており、安定している。

### ⑤抽象彫刻2（口絵5）（図6）

資料番号 NSM-717

高さ 325mm 幅 420mm 奥行 250mm

大きな一つ目、鼻、口を有した抽象的な彫刻である。目元にはまつ毛の表現が確認できる。頭部と思しき部位や鼻孔と口腔内には丸鑿による彫りが見られる。その他の部位はよく磨き上げられており、曲線と細い脚が入り組んだ非常に抽象度の高い造形をしている。

### ⑥抽象彫刻3（口絵6）（図7）

資料番号 NSM-799

高さ 575mm 幅 160mm 奥行 500mm

NSM-717の彫刻と形態が非常によく似ている。大きな一つ目、鼻、口を有した抽象的な彫刻である。目、鼻、口はそれぞれ異なる方向を向いている。

NSM-717の彫刻と比べて、口の開きが大きく、叫んでいるような表情をしている。NSM-717の鼻孔や口腔内に見られる彫りは確認できない。頭部にはしづく型のヒョウタンが乗せられている。このようにヒョウタンを乗せた彫刻作品は、写実的な彫刻でも、抽象彫刻でも多く作られている。背面には臀部のような部位も見られる。その臀部から二本の脚が伸びており、一本は先端に小さな足が表現されている。もう一方の脚は先端が二股に分かれている。

マコンデ彫刻の製作には手斧や鑿が使用されている。頭髪や衣服の彫り出しに特徴がある。頭髪の表現にはカーブが急な丸鑿が用いられ深めに彫られており(写真6)、衣服の表現にはカーブが緩やかな丸鑿が用いられ浅く彫られている(写真7)。複数の彫刻でこの特徴を確認することができる。様式が多様化し、マコンデ彫刻であるかどうかの定義が非常に難しい状況であるが、この特徴はマコンデ彫刻の特徴の一つであると考えている。また、顔つきにも特徴がある。彫りが深く、大きめの鼻、分厚い唇をしており、特に下唇が少し突き出ている傾向にある。眉毛は表現されていない。体躯は華奢で腕や足も細い。また乳房の表現は省略されている。仕上げにやすりで磨かれており、非常になめらかな肌触りをしている。アフリカンブラックウッドには油脂が含まれており、磨くことで光沢が発生するため、他の木材では出せない特有の質感となる。

## おわりに

本稿では、マコンデ彫刻の概説と南山大学人類学博物館が所蔵しているマコンデ彫刻について報告した。マコンデ彫刻は現在、マコンデ族出身ではない彫刻師による作品も多く、また様々な木材が使用され、新しい様式が次々と生み出されている状況にある。筆者はマコンデ彫刻の定義を、マコンデ族によって製作された彫刻であること、アフリカンブラックウッド製であること、本論で上げた四つの様式に区分されるものと考えていたが、この定義に当てはまらないマコンデ彫刻も多いため、再検討する必要がある。

美術品として革新的な造形作品が今後も生み出され

ていくことが予想される。また土産物として、購買層に合わせて様式の流行というものもあるため、様式面においては定義を設けることは難しいだろう。新しい様式の誕生はマコンデ彫刻が存続していくために必要なことである。しかし、マコンデ族以外の彫刻師によって、アフリカンブラックウッド以外の木材を用いた彫刻作品をマコンデ彫刻とみなすことができるだろうか。「彫刻師」と「素材」という点に着目し、他の事例とも比較しながら、引き続き調査をしていきたい。

## 註

- (1) アートという語について本稿では鑑賞的価値を有する絵画や彫刻作品等の創作物全般を指すものとして使用する。
- (2) スワヒリ語 スワヒリ語は東アフリカ海岸部及びインド洋に浮かぶ島々で広く使用され、ケニア、タンザニアでは公用語として使用されている言語である。バントゥー諸語に分類される。
- (3) NSM 番号 西江コレクション全913点にNSM-001～913の資料番号を付与している。資料番号は南山大学人類学博物館に寄贈された後につけたもので、西江氏による意図的な番号ではない。

## 参考文献

- 和田正平 1977「東アフリカ収集調査ノートより」『国立民族学博物館研究報告』、国立民族学博物館、2号1巻：227-238頁。
- 岩崎明子 2012「イメージが作る工房、工房が作るイメージ タンザニアアートの制作現場」『共在の論理と倫理—家族・民・まなごしの人類学』はる書房 324-348頁。
- 白石顕二 2006「アフリカルチャー最前線」、柘植書房新社。
- 川西陽一 2005「タンザニアの『ブツダ』あるいは『日本の神様』」『アジア・アフリカ地域研究』第4-2号：263-270頁。
- 仲井一志 2018「楽器と共に創る持続可能な森林—タンザニアのアフリカン・ブラックウッド」『海外の森林と林業』、国際緑化推進センター、No.101：9-13頁。
- マコンデ美術館 2003 マコンデ美術館図録「マコンデ彫刻」。



図1 マコンデ高原とタンザニア・モザンビークの国境となるルブマ川



写真1 アフリカブラックウッドの断面  
(マコンデ美術館にて筆者撮影)



写真2 ウジャマ彫刻 リッププラグ



写真3 ウジャマ彫刻 バナナの房



写真4 ウジャマ彫刻 かご



写真5 ウジャマ彫刻 頭上のヒョウタン

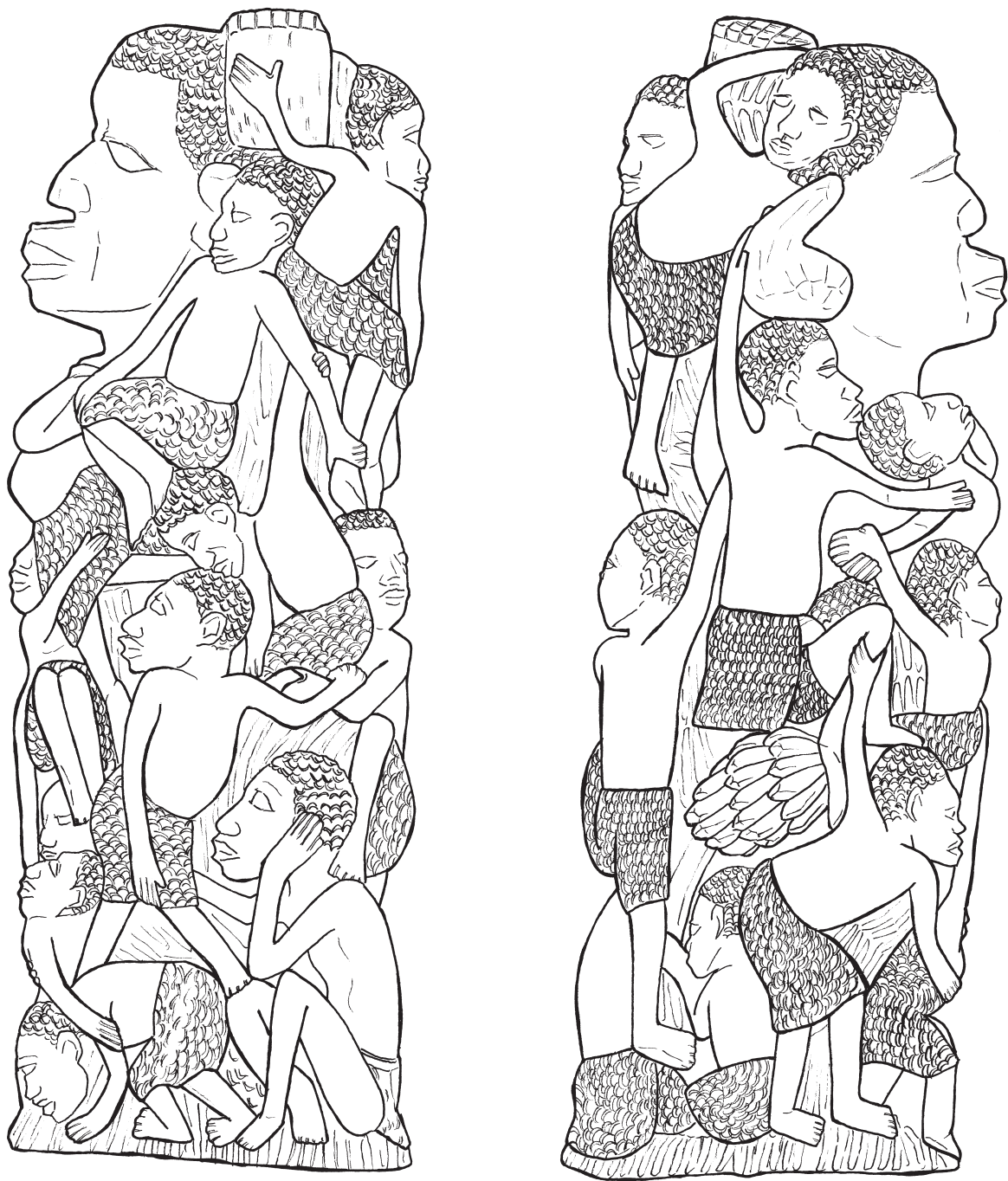


写真6 毛髮



写真7 衣服





0 20cm

図2 ウジャマ彫刻 実測図

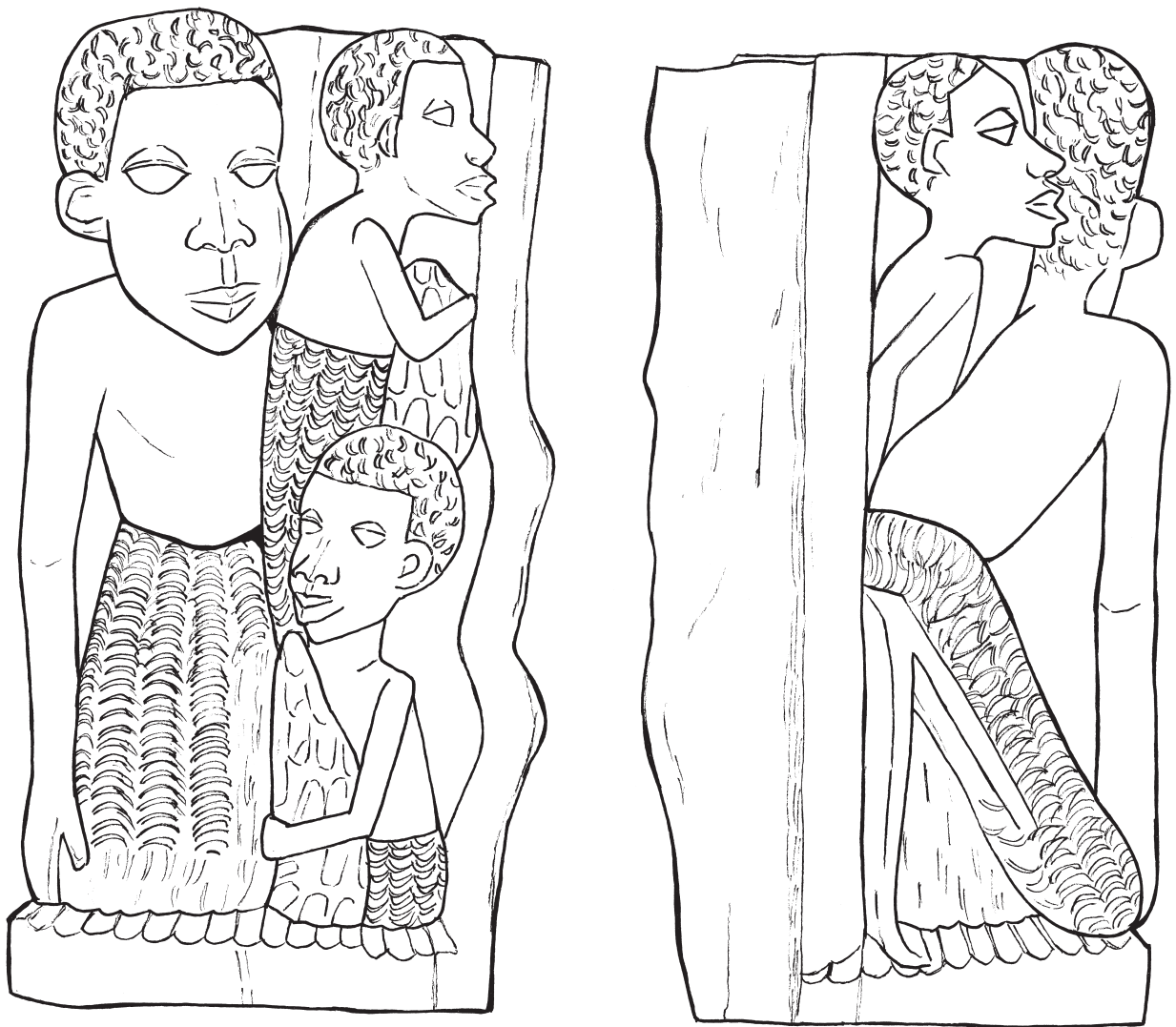


図3 ウジャマ彫刻 実測図



図4 シェタニ像 実測図



0 10cm

图5 抽象雕刻 实测图

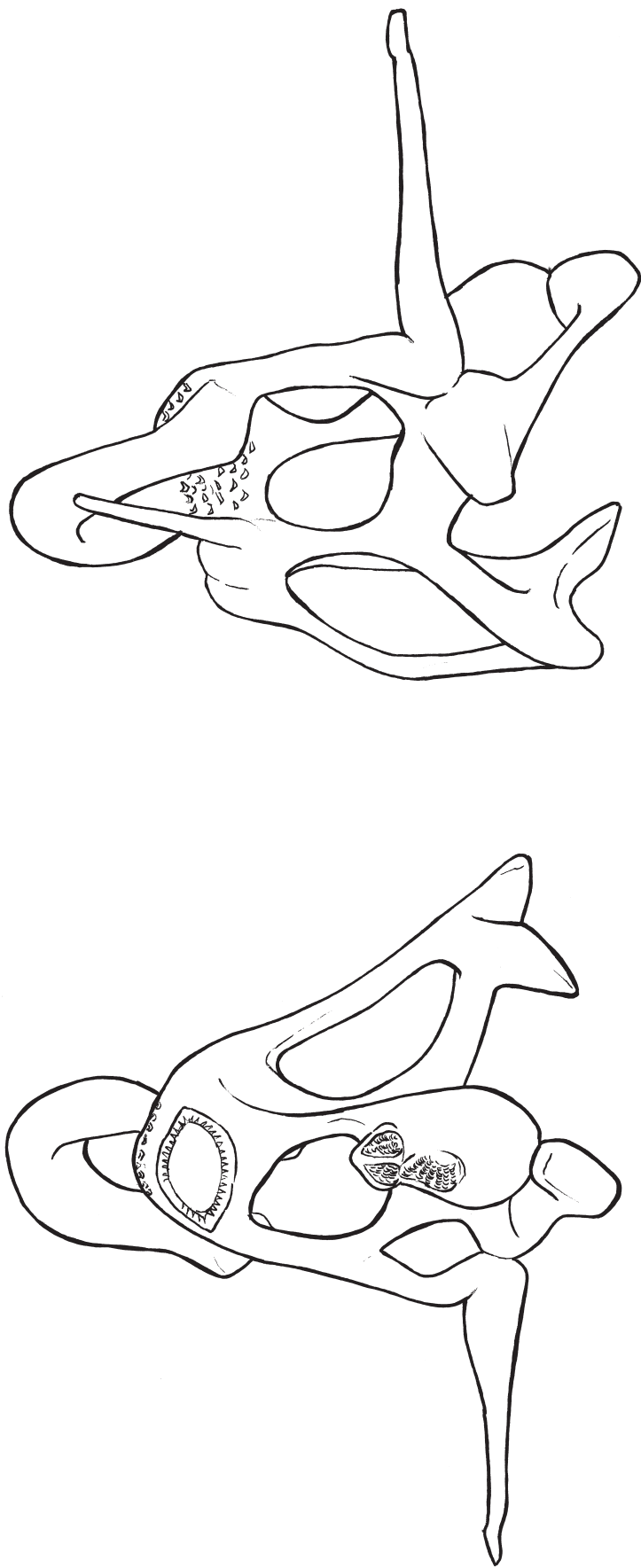


图 6 抽象雕刻 实测图

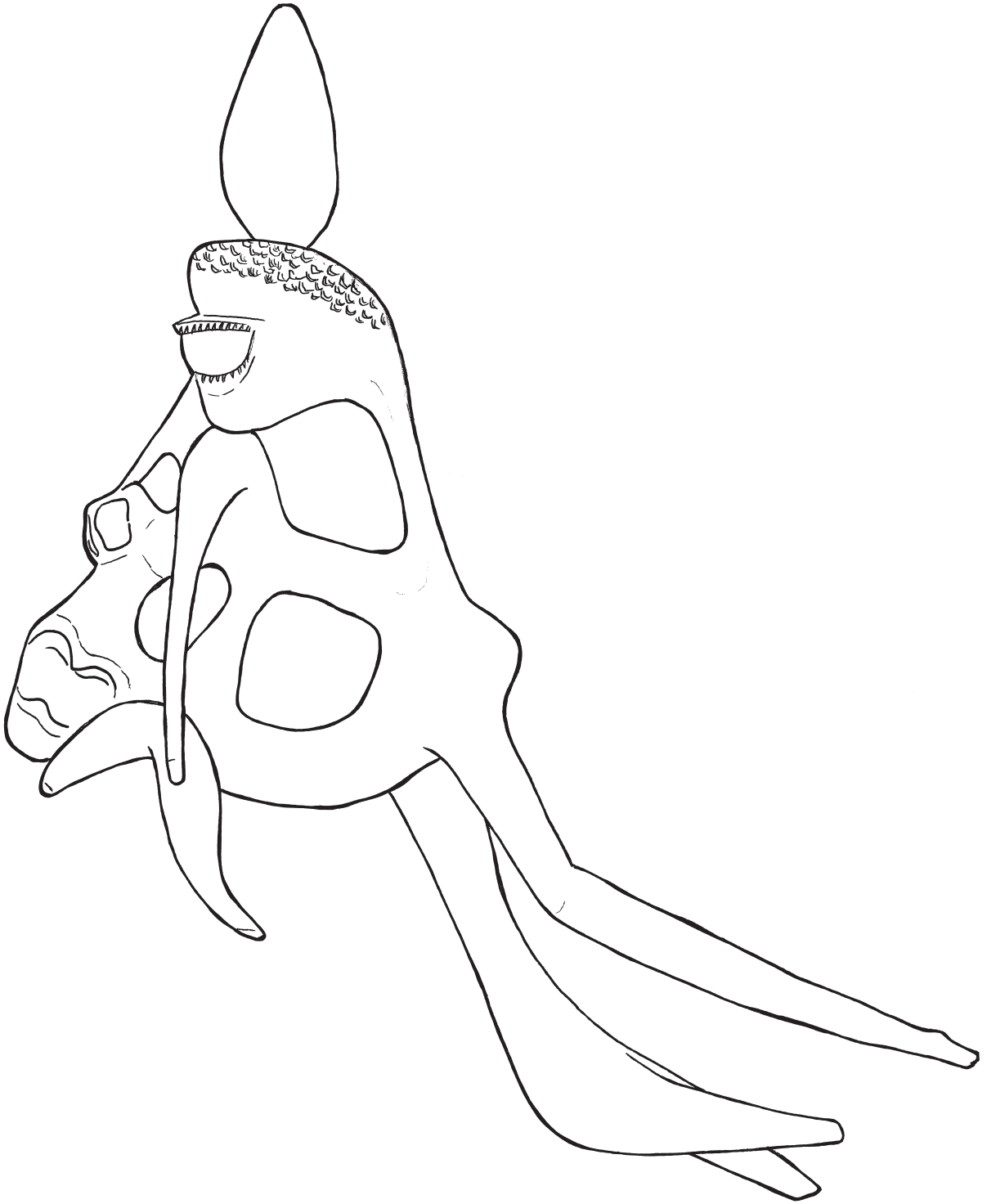


图7 抽象彫刻 実測図

## **Makonde Sculptures owned by Nanzan University Museum of Anthropology**

IHARA Ruri

This paper introduces Makonde Sculptures, the well-known art of Tanzania, owned by Nanzan University Museum of Anthropology-materials are from the items donated by the late Prof. NISHIE Masayuki at Waseda University in 2015. Makonde Sculptures had first been made in the 1920s in Makonde Plateau of Eastern Africa. The production started from sculptures designing ordinary life of local people, then developed into Ujamaa style, Shetani work as well as abstract sculptures. They usually used African blackwood, but because of the decrease of the trees themselves, recent artifacts are made of some other tree species. Additionally, more complicated styles occurred following the demand of artifacts as souvenirs, making the definition of Makonde Sculpture more vague. It is necessary to consider how to accept the change in material and the diversity of the style of Makonde Sculptures.

# 南山大学人類学博物館所蔵考古資料の現状と課題

——資料番号の整理から——

秦優莉香

## 1. はじめに

南山大学人類学博物館では考古学・人類学（民族学）・民俗学・歴史など多種多様な資料を収蔵している。本稿はそのうちの考古資料について、これまでの整理と現状を報告する。

所蔵する考古資料の入手経緯を明らかにすることは資料を研究対象にするにあたって欠かせないことであり、入手順を知ることは博物館のコレクション形成を俯瞰する上で重要なことである。当館には詳細不明のまま現在に至る考古資料も少なくはない。資料に付与されている番号に注目し、その資料がいつ頃、どのように入手されたのかを把握、整理することを試みた。

## 2. 南山大学人類学博物館所蔵考古資料

当館の考古資料は、大きく5つに分類することができる。①日本考古学研究所（考古学研究所）関連の資料、②人類学民族学研究所（人類学研究所）関連の資料、③授業や学生の調査による資料、④行政に関連する資料、⑤寄贈による資料である。

①は、神言修道会の神父であったジェラード・グロート氏が1946年に千葉県市川市で設立した日本考古学研究所による関東の縄文土器を中心とした資料<sup>(1)</sup>、グロート氏の後任で1952年から考古学研究所（日本考古学研究所から改称）の所長を務めたヨハネス・マリナー氏によるヨーロッパの旧石器時代を中心とする石器資料である。日本考古学研究所が収集した考古資料の一部は、マリナー氏の離日によって考古学研究所が閉鎖することに伴い、1958年に千葉県市川市に寄贈されたが、残りは南山学園（当時の南山大学人類学研究所）に移管されることになった。マリナー氏が収集した石器資料も同時に南山学園に移管されている。

②は、1949年に設立された南山大学人類学民族学

研究所（人類学研究所）が標本として購入した資料、中山英司氏、小林知生氏、早川正一氏などの教員による研究調査で収集された資料（愛知県、岐阜県、石川県、富山県など）、南山大学東ニューギニア学術調査団収集の考古資料、寄贈による資料がある。購入や寄贈による資料については、どの資料が購入、寄贈によるものなのか不明なものが多い。

③は授業やゼミで調査を行った際の資料、南山大学文化人類学研究会考古サークルが発掘、収集した資料で、岐阜県のもが多く含まれている。

④は行政や企業の依頼を受けて行った調査による資料である。1985（昭和60）年に本学教員であった重松和男氏を代表とする高蔵遺跡夜寒地区調査会が調査した、高蔵遺跡の資料がこれにあたる。名古屋市教育委員会、東海興業、岩崎設計、安田工機不動産部によるプロジェクトチームの依頼を受けて、調査を担当した。発掘や整理事業には学生も多く参加した。高蔵遺跡夜寒地区の発掘調査については当館紀要第10号に詳しい。

他にも行政や企業の依頼によって調査を行った事例はあるが、資料は依頼元に保管されている。当館紀要第4、5、8、9、11、12号の報告がこれに該当する。

寄贈による資料は、①、②、③にもそれぞれ含まれているが、⑤は特に近年寄贈の受け入れを行ったコレクション<sup>(2)</sup>を指す。受け入れ後に整理が行われているものと、未整理のものがある。

## 3. 資料番号の種類

これらの資料には資料番号が付与されているものと、付与されていないものがある。更に、時期によって採番方針や番号が表す意味が違い、またその記録が散逸しているため混乱が生じている。現在確認できているそれぞれの番号について簡単に説明していく。



## ・遺跡番号

日本考古学研究所、考古学研究所の資料に付けられている番号で、ローマ数字で遺跡を示している番号である。遺跡によっては採番が行われ、遺跡番号に加えて出土層位が注記されている。

1976年に遺跡と番号の対応や大体の量についてまとめた『51年度G棟地下収蔵遺物移動に関する報告I—特に市川市寄贈遺物について—』という冊子を、南山大学文化人類学研究会考古サークルが発行している。これを基に2008年に当時の当館職員によって作成されたとみられる遺跡台帳に、現時点で確認できている情報を加えて提示した(表1-1～表1-5)。

考古サークルでは元々、高蔵遺跡の遺物で卒業論文を執筆する学生の整理作業を手伝い、実技を身につけることを昭和51年度の活動目標としていた。整理作業を行うためのスペースを作るにあたって、収蔵庫内に採集された状態のまま長年保管されていた遺物を移動させることが必要になったが、資料は入れられた木箱のチョーク書きの表示が消えかけている、カードに記載された文字が消えかけている、虫食いにより判読できないなど、必要な情報が失われかけていた。そのような状況で資料の考古学的価値の更なる消失を危惧した考古サークル員によって、高蔵遺跡の遺物と並行して整理が行われた<sup>(3)</sup>。収蔵庫では遺跡番号を付与した資料が、更にアルファベットを振られた箱に分けて保管されていた。

冊子上では、アルファベットにはS、LS、LDS、B、Shなどがあり、B=骨、Sh=貝であることは解明できたが、他は何を意味するのか分からないこと、各遺跡、遺物についての詳細報告が行えなかったこと、名称のみで遺跡の所在地が分からないといった問題点が残っていると記述されている。

アルファベットの意味については、当館所蔵の書類資料<sup>(4)</sup>に手書きの対応記述が残っていたのを今回発見し、解明することができたため表記を整えて提示している(表2)。つまりLSは研究室にあった土器片、LDSは研究室内引き出しにあった土器片で、移管の際にこういった分類情報が欠落した状態で運び込まれ、そのまま詳細不明になってしまったとみられる。

## ・J番号

日本考古学研究所時代ではなく、名古屋で採番された番号とされる。下記の登録番号との新旧関係は不明とされていたが(宮田2000)、J番号は登録番号以前に使用されていた資料の番号で、JAPANのJなので外

国の資料にはついていない、という1980年に書かれた手書きのメモ<sup>(5)</sup>が残されていた。そのためJ番号が先行して付与されていた可能性が高い。しかし、メモの根拠が不明なため確実であるとは言い難い状況である。J番号はJ-1からJ-703まで存在し、基本的には日本の考古資料に付与されているが一部に銅鼓やアイヌ民族の生活資料が含まれている。

## ・登録番号

0～5番、10番～11番の番号が振られたもので「0-〇〇」、「1-〇〇」と表記される。「陳列室収蔵資料の整理要項」と書かれた手書きのノートが存在し、J番号と同様に名古屋で採番されたとみられる。当初は0番を先土器時代、1番を縄文時代、2番を弥生時代、3番を古墳時代、4番を歴史時代、5番をその他、6～9番に該当するものはなく<sup>(6)</sup>、10番を現在ひとまず外国として総括分類、と定めたようである。その後、0番を日本の旧石器時代、5番を北海道、アイヌの生活資料、10番をマリナーコレクションとその他の外国考古資料としている。また、11番はパプアニューギニア資料の番号であるが、収集された石器などの考古資料には11番の番号が付与されている。資料を時代や地域に分けて整理しようとした結果とみられる。当館紀要19号では縄文時代の主な資料を紹介しているため、特に「1-〇〇」の番号について触れている。「J番号」と「1番号」の対照表も存在しない(宮田2000)とあるが、1980年のメモに既にJ番号登録番号照合表について書かれており、現物の内容を確認することもできた。また、南山大学人類学民族学研究所の収蔵遺物カード(縦7.5cm、横12cmで統一のフォーマットのもの)、バインダーに綴じられた南山大学人類学研究所附属陳列室備品台帳(B5サイズ、統一のフォーマットのもの)、ルーズリーフに手書きされた台帳など複数の整理情報が残されている。

## ・個々の通し番号

遺跡単位、コレクション単位で採番されている番号である。ゼミや学生の調査によって収集された資料、マリナーコレクションの石器資料に元々付与されていたもので、単に数字が通しで振られているものである。

## ・2010番号(移転準備番号)

当館は2013年にG棟からR棟に移転をした。その準備の際に、2010年から主な資料には「2010-〇〇」という移転準備番号が付与された。既に資料番号があ

るもの、ないもの関係なく2010番号が振られたが、移転用の番号であるため資料の性質を鑑みたものではなく、付与された番号に意味がない(吉留2013)という問題が残された。

#### ・寄贈者名番号

2004年以降に受け入れた資料に対して付与した番号である。コレクションごとに、漢字一文字を一単位とし、名字は大文字、名前は小文字にて表す(ただし、寄贈者の名字が一文字の場合は、ひらがな一文字を一単位とする)という方法で採番し、通し番号が付与されている。

この他、未登録の資料に加え、資料に注記がないために報告書の図面番号を資料番号にしているものも存在する。このように複数の資料番号が存在するため、1つの資料でも最大で4つの番号を持つ場合もある<sup>(7)</sup>。

## 4. 考古資料の現状

現在、当館の考古資料はR棟博物館の展示室、収蔵庫、G棟の旧博物館第三展示室に展示・保管されている。展示資料については、「展示アルバム」が2007年から作成されてきた。作成については当館紀要第26号に詳しい(吉田2008)。展示アルバムでは展示場所ごとの資料について、写真と共に資料番号や注記が細かく記載されている。これによって展示してある資料の情報や所在を把握することができる。しかし、展示していない資料については展示アルバムに含まれていないため、存在や所在が把握できない。G棟から移転の際にR棟の展示室、収蔵庫に移動させた資料には2010番号が付与されていたが、番号と所在は紐づけされなかった。そのため、同じ遺跡の遺物でも資料の所在や全体量を把握することが困難となっている。また、貸し出しや調査の依頼があった際にも資料を探し出すために多大な労力が必要となる、過去の調査の記録が略称や通称で残されているため探し出すことができない、地名のみで遺跡の所在が分からないなどの問題が生じている。

当館の近年の考古資料台帳は、それぞれのコレクションごと、または展示アルバムごとに、「更新中」や「原典」などのエクセルデータが複数存在していた。その中でもデータベース用に作成したとみられる、一部の台帳を統合した「考古資料台帳」が基本となっていたようである。しかし、台帳に記載があるが

資料の所在が不明、資料は存在するが注記番号や台帳への記載がないものがあり、所蔵する考古資料を一括で確認できる台帳は存在しない状況だった。紙媒体では整理されていた情報も、担当者に入れ替わりによって情報が途絶え、引き継がれなかったとみられる。

当初は展示アルバムによって確認できているR棟博物館の展示室の資料と、R棟博物館収蔵庫の資料の所在を明らかにして台帳を補完しようと試みた。しかし、考古資料の大半がG棟の旧博物館第三展示室で保管しているため、G棟の考古資料を含めずに一括した台帳は作成不可能であった。

G棟に保管している考古資料はプラスチックの薄型運搬容器(当館ではテンバコと総称)に収納し、テンバコは第三展示室中に平積み状態で置かれていた。テンバコは合計で約1000箱あり、土器破片や自然遺物などの考古資料が発掘採集されたままの状態、新聞紙や袋に入れられた状態、資料番号が注記された状態など様々な状態で入れられていた。日本考古学研究所、考古学研究所から移管された資料を木箱からテンバコに移したり、人類学民族学研究所(南山大学人類学研究所)の調査発掘資料が紀要での報告のため一部整理されていたりと、何度か入れ替えをしている痕跡もあり、テンバコには遺跡名や整理担当者の名前を書いたテープが貼られていた。

2019年7月5日～10月19日にかけて、本学人文学部人類文化学科准教授上峯篤史氏の指導の下、有志の学生によってテンバコに任意の番号が振られた。これはG棟収蔵庫の考古資料の概要を把握し、今後の資料整理に役立つため、資料の種類、遺跡、注記や遺跡番号などを記載した簡易的なリストが作成された。この簡易リストを用いて、初めにR棟展示室の資料、R棟収蔵庫の資料を網羅し、G棟の資料を順次加えていこうと構想した。

2020年3月、コロナ禍による休館中にR棟博物館前室の整理を行ったことで、登録番号台帳(紙媒体)、「J番号登録番号照会表」(紙媒体)、『51年度G棟地下収蔵遺物移動に関する報告I—特に市川市寄贈遺物について—』(紙媒体)、「人類学博物館収蔵遺物リスト 弥生時代編1979」(紙媒体)を相次いで発見した。エクセルデータでは人類学民族学研究所、人類学研究所の発掘・現地調査の記録をまとめた「調査一覧」、G棟にある考古資料の遺跡をチェックした「収蔵資料遺跡リスト」のデータを確認し、紙媒体、エクセルデータであちこちに散逸するこれらの情報を組み合わせ、2020年9月から考古資料を一括管理する

ための台帳の作成に取り掛かった。作業としては以下の通りに行った。

- ①「考古資料台帳」をベースに、各データを統合し、すぐに確認や判断できない情報は要確認事項として後回しにし、確実なデータを増やしていった。
- ②遺跡番号は日本考古学研究所、考古学研究所の資料にしか付けられていないこと、遺跡番号が振られた資料にはJ番号、登録番号がほぼ確実に振られていることから、最初にJ番号（J-1～J-703）を抽出した。遺跡番号から出土地が確認できたものについては情報を追加した。
- ③登録番号順に整理されている南山大学人類学民族学研究所の収蔵遺物カードを参照し、J番号が付与されていない登録番号（0～5番、10番）を順番に抽出して台帳に収蔵場所の記載をした。

11番代のニューギニアの考古資料や寄贈による資料はコレクションごとに既に個別の台帳が作成されているため、考古資料台帳の完成後に統合することにした。先に資料番号への理解不足から誤って登録されている資料（例えば1-1011が1101-1とされているなど）や注記の誤読によって欠番とされていた資料を、1点1点実見して修正した。また、資料の整理作業を複数名で行うようにし、思い込みによる注記の誤読や資料の誤認を減らすように努めた。この作業は現在も進行中である。

G棟の第三展示室では前述の通りテンバコが平積みそのまま置かれ、石器などの重量のある資料が入ったテンバコは移動も容易にはできず、整理や活用が非常に難しい状態であった。耐震面でも不安があったため、耐震精度の高い棚を導入し資料を安全かつ活用しやすいようにする計画が立てられ、2021年5月16日、17日に資料を保管するための4段中量棚29台が設置された。計画に先立ち、2021年4月1日～5月14日の期間で、全てのテンバコを第三展示室から移動し、テンバコの中身の確認も同時に行われた。棚設置後の5月19日～5月26日にテンバコが第三展示室内に戻された。棚割りを地域別に設定したことで、同じ遺跡の遺物をまとめて保管することが容易になった。

G棟に保管されていた資料は、遺跡番号と遺跡番号ごとに採番された番号が付与されているものが多いが、J番号や登録番号が付与された資料も含まれてい

るため、これまで台帳上で所在不明となっていた資料を確認し台帳を補完することができた。

## 5. 課題と展望

これまでの整理や資料番号を基に、考古資料を一括した台帳の作成を試み、現在も作成中である。過去にもデータベースによる資料の公開が目指されてきたが（吉留2013）、実現には至っていない。多くの貴重な資料を有しながら、活用が限定されている状態である。今後の資料の活用を考えると、データベース化は必須であり、そのためには提供する情報が必要となる。一般に向けての公開もさることながら、当館にどのような資料があるのかを学生、研究者に知ってもらい、卒業論文や学術論文に活かしてもらうことが大学博物館としても重要ではないかと考えている。

そのためには考古資料を一括で管理できる台帳の作成と情報の補完を進め、当館所蔵資料についての調査研究をやすくし、研究成果が発表された場合にはそこに情報を追加していけるような仕組みを作ることで情報が散逸しないようにするのが所蔵館としてすべきことであり、目指すべきことだと感じている。

## 6. おわりに

本稿を執筆するにあたって、過去の書類資料や執務日誌、博物館日誌の考古資料に関する記述部分の確認を行った。その結果、常に過去の資料の整理が試みられ、特に当館に嘱託職員が置かれるようになった1995年以降からは整理の成果を紀要で報告されてきたことを確認した（当館紀要15～20号）。これは学生の卒業論文や博物館のアルバイト、博物館実習、外部の研究者など多くの協力によって成し遂げられてきた。今後もこのような協力を得て、紀要にて資料の報告を行っていくことが理想だと感じている。

また、書類資料を確認して新たに分かることも多かった<sup>(8)</sup>。何の書類かという分類をして整理されているが、そこで止まっているため内容についても丁寧に確認していく必要性を実感した。資料番号についても、番号の意味を認識した上で資料や注記を確認していくと、別の遺跡の資料を紀要にて報告してしまっていると思われる例もみられた<sup>(9)</sup>。

どのように整理を行っても詳細不明な資料は残ると思われるが、確実な情報を積み上げて可能な限り情報を補完していくことを続けていきたい。

## 註

- (1) これらは遺跡の調査・採集資料と寄贈資料からなる。資料の特色、詳細については「コレクションの文化資源化と大学・地域博物館の連携～ジェラード・グロート神父と日本考古学研究所のコレクションを中心として～」(領塚 2013) に詳しい。
- (2) 本学教員であった早川正一氏が調査を行ったパラオ共和国、ミクロネシア連邦ヤップ島の考古資料、同じく本学教員であった大塚達朗氏による関東の縄文土器資料、当館紀要 35 号掲載の北村コレクション、36 号記載の番澤コレクションなどが含まれる。
- (3) 取蔵庫内には遺跡番号が注記された日本考古学研究所(考古学研究所)の資料以外に人類学民族学研究所(人類学研究所)の資料も混在し、考古サークルは遺跡番号の無い資料について、冊子内で遺跡名のみ記載されていたもの、として掲載している。
- (4) 伊藤秋男氏が 1969(昭和 44) 年に入手した南山大学人類学民族学研究所の一連の活動記録書類のこと(吉田 2009)。A5 サイズのノートで、表紙に Collections ARCHAEOLOGICAL INSTITUTE とあり、日本考古学研究所での資料の分類が記載されている。
- (5) 退職する臨時職員が残した手書きのメモで 1980 年 3 月 25 日と日付が書かれている。記載内容は、遺物を探したい時、出土地を調べたい時どのようにしたらよいかという手順と、業務上の語句説明である。
- (6) 6～8 番の番号はないが、9 番には後に能舞台資料が採番されている。
- (7) 例えば日本考古学研究所の資料である千葉県市川市の堀之内貝塚の縄文深鉢には、遺跡番号が III で、採番されているので III<sup>p</sup>-1 という番号、J-160 という J 番号、縄文土器なので 1-1099 という 1 番の登録番号、2010-573 という 2010 番号が付与されている。
- (8) オーストラリアの博物館との標本交換の記録や、南山大学へのオーストラリア資料の寄贈の記録を確認した。関連性や詳細については今後調べていきたい。
- (9) 当館紀要 2 号に掲載されている土師器の小型壺(図版十一 236) は瑞穂遺跡の出土地点不明の資料とされているが、3J76 という注記がされている。3J は考古学研究所の遺跡番号で、当時の所在地は青森県北津軽郡喜良市村喜良市上とされる。遺跡番号を信用するのであれば、遺物整理の際に混入し、瑞穂遺跡出土と誤認された可能性が高い。

## 参考文献

- 安藤義弘・松原隆治・伊藤秋男 2007 『伊藤秋男先生古希記念考古学論文集』伊藤秋男先生古希記念考古学論文集刊行会、534 頁。
- 北澤智豊 2016 「所蔵品の整理について—武蔵野美術大学美術館・図書館の事例を中心に」『ミュージオロジーの展開 経営論・資料論』、株式会社武蔵野美術大学出版局、334-357 頁。
- 南山大学五十年史作成小委員会編 2001 『南山大学五十年史』南山大学。
- 南山大学史料室 2011 『南山学園史料集 6 南山大学の人類学』南山学園。
- 南山大学人類学博物館 1980 「瑞穂遺跡—1951・52・54 年度発掘調査報告—」『南山大学人類学博物館紀要』第 2 号、南山大学人類学博物館。
- 南山大学人類学博物館編 2012 『明治大学博物館 南山大学博物館 合同特別展 人類史への挑戦 南山大学考古・民族コレクション』南山大学人類学博物館。
- 南山大学創立 75 周年記念誌編纂委員会編 2007 『HOMINIS DIGNITATI 1932-2007 南山大学創立 75 周年記念誌』学校法人南山学園。
- 西野嘉章 1996 『大学博物館—理念と実践と将来と—』財団法人東京大学出版会。
- 古市保子編 1976 『51 年度 G 棟地下収蔵遺物移動に関する報告 I—特に市川市寄贈遺物について—』南山大学文化人類学研究会考古サークル。
- 宮田千春編 2000 「南山大学人類学博物館 展示品目録 1 縄文時代編 1」『南山大学人類学博物館紀要』第 19 号、南山大学人類学博物館。
- 吉田泰幸 2008 「第一展示室(考古資料展示室) 展示アルバム作成メモ」『南山大学人類学博物館紀要』第 26 号、南山大学人類学博物館、1-9 頁。
- 吉田泰幸 2009 「南山大学人類学博物館所蔵の「考古学研究の研究」に関する資料のアーカイブ化に向けて 附・第一展示室展示アルバム作成メモ追記」『南山大学人類学博物館紀要』第 27 号、南山大学人類学博物館、1-13 頁。
- 吉留正樹 2013 「人類学博物館所蔵資料データベースの運用にむけて」『南山大学人類学博物館紀要』第 31 号、南山大学人類学博物館、63-71 頁。
- 領塚正浩 2013 「コレクションの文化資源化と大学・地域博物館の連携～ジェラード・グロート神父と日本考古学研究所のコレクションを中心として～」『明治大学博物館・南山大学人類学博物館合同シンポジウム成果刊行物 博物館資料の再生—自明性への問いとコレクションの文化資源化—』、204-222 頁。

表 1-1 遺跡番号リスト

遺跡番号	遺跡名：南山	遺跡名：行政	遺跡所在地	方法	調査団体	調査・採集者	調査年月	遺物
I	中沢貝塚	中沢貝塚	千葉県鎌ヶ谷市中沢貝橋山		日本考古学研究所			土器、土製品、石器
II	姥山貝塚	姥山貝塚	千葉県市川市柏井町1丁目-1204 他	発掘		G.Groot, H.Shonig	1940 (S10) /02/01 ~ 02/29	土器、土製品、石器、骨角器、貝製品
III	堀之内貝塚 (1)	堀之内貝塚	千葉県市川市堀之内2丁目	発掘	日本考古学研究所	G.Groot	1939 (S14) /11 ~ 12	A-土器、土製品、石器
	G.Groot					1939 (S14) /11 ~ 12	C-土器、土製品、石器、	
	G.Groot, Reinowzky					1946 (S21) /04/30	D-土器 E-土器	
IV	向油田貝塚	向油田貝塚	千葉県香取郡山田町向井字たらの木 (向油田)	発掘	日本考古学研究所		1947 (S22) /06/28 1949 (S24) /06	
V	欠番または不明							
VI	ニツ木 (VI)	ニツ木向台	千葉県松戸市ニツ木向台 534 他		日本考古学研究所		1950	
	ニツ木 (VII)	勢至前遺跡	千葉県松戸市ニツ木字勢至前八ヶ崎字株付					
VII	木之内明神貝塚	木内明神貝塚	千葉県香取郡小見川町木内字宮前	発掘	日本考古学研究所	K.Sakuma	1947 (S22) /10/19 ~ 11/04	土器
VIII	油田		千葉県香取郡油田	発掘?	日本考古学研究所		1947 (S22) 06/25 ~ 28	土器
IX	東坂							土器
X	最花貝塚	最花貝塚	青森県下北郡田名部町最花	発掘、表採	日本考古学研究所	篠遠喜彦	1949 (S24) /05/27	土器
XI	瀬野		青森県むつ市 (脇野沢村)				1949 (S24) /05/26	土器、土製品、石器
XII	脇野沢		青森県脇野沢中学校北側畑				1949 (S24) /05/25?	土器、土製品、石器
XIII	榎林	ニツ森貝塚	青森県上北郡天間林村榎林貝塚		日本考古学研究所	G.Groot, H.Maccord, 篠遠喜彦	1949 (S24) 05/18	A-土器、 B-土器、石器、骨角器
XIV	中山競馬場	古作貝塚	千葉県船橋市古作2丁目他					土器
XV	東福寺	鱒ヶ崎貝塚	千葉県東葛飾郡流山町鱒ヶ崎東福寺					土器、石器
XVI	清水台		福島県相馬郡新地町大字小川字貝塚西					石器
XVII	虫幡		千葉県香取市虫幡					土器、石器
XVIII	八本お宮		千葉県香取市					石器
XIX	境		東京都武蔵野市境		日本考古学研究所			土器、土製品、石器
XX	北代	北代遺跡	富山県婦負郡長岡口大口北代	表採	日本考古学研究所	篠遠喜彦	1951 (S26) /02/25	A-土器、B-土器、石器
XXI	永代	永代遺跡	富山県中新川郡南加積村永代	表採	日本考古学研究所	篠遠喜彦	1951 (S26) /02/25	土器、石器
XXII	丸山		富山県中新川郡白萩村丸山	表採	日本考古学研究所	篠遠喜彦	1951 (S26) /02/26	A-土器、石器 B-土器、石器
XXIII	極楽寺	極楽寺遺跡	富山県中新川郡白萩村極楽寺	表採	日本考古学研究所	篠遠喜彦	1951 (S26) /02/26	土器、石器
XXIV	観ヶ森貝塚	観ヶ森貝塚	富山県婦負郡長岡村観ヶ森	表採	日本考古学研究所	篠遠喜彦	1951 (S26) /02/25	土器、石器
XXV	上山田	上山田貝塚	石川県河北郡宇ノ気町上山田		日本考古学研究所			土器
XXVI	北塚塚	北塚遺跡	石川県金沢市北塚		日本考古学研究所			土器、石器
XXVII	朝日貝塚	朝日貝塚	富山県水見郡水見町朝日	表採	日本考古学研究所	K.Kawakami		土器、石器
XXVIII	村杉遺跡	村杉遺跡	新潟県北蒲原郡笹村大字字村杉	発掘		G.Groot	1940 (S15) /04.25 ~ 26	土器、石器
XXIX	三沢		青森県三沢市					
XXX	新羽	今井平遺跡?	群馬県多野郡上野村大字新羽字今井平	発掘	日本考古学研究所	酒詰伸男、桜沢重利		土器、石器
XXXI	立屋敷	立屋敷遺跡	福岡県遠賀郡水巻町立屋敷		日本考古学研究所			土器
XXXII	猿根台貝塚	猿根台遺跡	千葉県東葛飾郡鎌ヶ谷中沢猿根台	表採	日本考古学研究所	G.Groot、篠遠喜彦	1950 (S25) /02	土器
XXXIII	鳴雷台	鳴神山 A 遺跡	千葉県市川市大柏大野鳴雷	表採	日本考古学研究所	G.Groot、篠遠喜彦	1950 (S25) /02	土器、土製品、石器
XXXIV	向山貝塚	向山貝塚	茨城県北相馬郡高井村上高井向山	表採	日本考古学研究所	G.Groot、篠遠喜彦	1950 (S25) /05	土器、石器
XXXV	神明社前貝塚		茨城県北相馬郡高井村上高井神明社前	表採	日本考古学研究所	G.Groot、篠遠喜彦	1950 (S25) /05	土器、石器
XXXVI	八坂神社横		茨城県北相馬郡高井村下高井八坂神社横	表採	日本考古学研究所	G.Groot、篠遠喜彦		土器
XXXVII	高野台遺跡	中沢高野台遺跡	千葉県印旛郡富里町中沢高野台	表採	日本考古学研究所	G.Groot、篠遠喜彦、A.Yasui		土器、土製品、石器
XXXVIII	頭能台	函能古墳? 仁井宿東遺跡?	千葉県香取郡香西村頭能台	表採	日本考古学研究所	篠遠喜彦、江森正義、T.貝塚	1950 (S25) /01/07	土器
XXXIX	三郎作貝塚		千葉県香取郡香取町	表採	日本考古学研究所	篠遠喜彦、江森正義、T.貝塚	1950 (S25) /01/07	土器、土製品、石器
XL	城之台貝塚		千葉県香取郡神里村城之台	表採	日本考古学研究所	酒詰伸男、篠遠喜彦		土器
XLI	矢向貝塚		千葉県安房郡国府村矢向	表採		酒詰伸男		土器、石器、骨角器
XLII	新地		福島県相馬郡新地町大字小川字貝塚西					土器、石器
XLIII	大湊下町八森		青森県むつ市大湊下町八森					土器
XLIV	川内町戸沢		青森県むつ市戸沢					土器

表 1-2 遺跡番号リスト

遺跡番号	遺跡名：南山	遺跡名：行政	遺跡所在地	方法	調査団体	調査・採集者	調査年月	遺物
XLV	大湊町大平荒川		青森県むつ市大湊町大平荒川					土器
XLVI	無尻		青森県下北郡東通村無尻					土器
XLVII	川内町葛沢		青森県むつ市川内町葛沢					土器
XLVIII	平石							土器
XLIX	山川	山川古墳？ ショウフ井戸遺跡？	千葉県香取市		日本考古学研究所			土器
L	白井	白井大宮大貝塚	千葉県香取市白井大宮台	発掘		K. Sakuma	1947 (S22) /10/3	土器
LI	長者ヶ原	長者ヶ原遺跡	新潟県西頸城郡糸魚川町長者ヶ原	発掘	日本考古学研究所	G.Groot, I.Murokawa, Y.Sato	1940 (S15) /05/10 ~ 11	土器、石器
LII	岩名神社付近	岩名天神前遺跡？	千葉県佐倉市岩名字宮前？	表採	日本考古学研究所	酒詰伸男、篠遠喜彦		土器
LIII	馬門		青森県上北郡野辺地町馬門	表採	日本考古学研究所	G.Groot,H.Maccord 篠遠喜彦	1948 (S23) /10/21	土器、石器
LIV	東平内		青森県東津軽郡東平内村	表採	日本考古学研究所	G.Groot,H.Maccord, 篠遠喜彦		土器、石器
LV	善福寺	善福寺遺跡	東京都杉並区善福寺 A、B、C（北端）、D、E（代官山）	表採	日本考古学研究所			土器、石器
LVI	下石神井		東京都練馬区下石神井	表採				土器、石器
LVII	天理女学校内		奈良県山辺郡門波市町布留天理女学校内 東部遺跡	発掘	日本考古学研究所	酒詰伸男		土器
LVIII	野島（北陸）		北陸					土器
LIX	真間		千葉県市川市真間 5 丁目 テニスコート西方ゴミ穴					土器
LX	須和田遺跡（貝塚）		千葉県市川市須和田 2 丁目 千葉県市川市須和田 2 丁目（根郷留見、 久保上、諸）	表採		G.Groot	1939 (S14) /05/28	土器、石器、自然遺物
LXI	三中校庭貝塚	三中校庭遺跡						土器
LXII	市川第 3 中学校校庭	三中校庭遺跡			日本考古学研究所			土器
LXII-2	春日神社裏		千葉県市川市曾谷 3 丁目					土器、石器
LXII-3	三中校庭内小円墳	三中校庭遺跡？		発掘？				石器
LXII-4	三中前畑中			表採	日本考古学研究所	寺崎氏発見	1950 (S25) /11 頃	土器
LXIII	赤羽根		愛知県渥美郡赤羽根町					土器
LXIV	蝦夷島貝塚	貝島貝塚	岩手県西磐井郡油島村蝦夷島	発掘	日本考古学研究所	江坂輝弥、吉田格	A、1946 (S21) /10/6 B、1946 (S21) /11	土器、石器、骨角器 土器
LXV	京ノ瀬	原遺跡？ 大師堂遺跡？	新潟県東蒲原郡揚川村京ノ瀬	発掘 表採		G.Groot,E.Naberfeld S.鈴木氏寄贈	1940 (S15) /5/1 1940 (S15) /5/17、6/3	土器 土器、石器
LXVI	西村八幡宮	宮野遺跡	新潟県東蒲原郡揚川村大字西村			E.Naberfeld 寄贈	1939 (S14) /08/25	土器、石器
LXVII	貝塚							土器、石器
LXVIII	東川村		新潟県東蒲原郡阿賀町	表採		G.Groot、K.Ogi	1940.05.22	土器
LXIX	西沢							土器、石器
LXX	花輪台		茨城県北相馬郡文村早尾	発掘	日本考古学研究所	吉田格、江坂輝弥、芹 沢長介、野口義磨、白 崎高保	1946 (S21) /9/30 ~ 10/2、 10/6 ~ 8	土器、土製品、石器、骨角器
LXXI	大ヤシキ					G.Groot	B: 1940 (S15) /5/3	A-土器、石器 B-土器、石器
LXXII	揚城							土器、石器
LXXIII	キツネクボ		青森県上北郡七戸町野崎狐久保か？			A、B-鈴木氏寄贈		A、B-土器
LXXIV	カノセ							土器
LXXV	十二山神社							土器、石器
LXXVI	古鉄砲町		新潟県東蒲原郡阿賀町津川字古鉄砲町か？					土器、石器
LXXVII	伊勢之宮脇							土器、石器
LXXVIII	神明宮							土器、石器
LXXIX	平幡			表採	日本考古学研究所	鳥居博士採集品		土器、石器
LXXX	夏島貝塚	夏島貝塚	神奈川県横須賀市追浜飛行場内夏島 (神奈川県横須賀市夏島町)	発掘	日本考古学研究所	Hubert G.Shenck,G. Groot、江坂輝弥、篠 遠喜彦		土器、石器、骨角器
LXXXI	長者屋敷							土器

表 1-3 遺跡番号リスト

遺跡番号	遺跡名：南山	遺跡名：行政	遺跡所在地	方法	調査団体	調査・採集者	調査年月	遺物
LXXXII	雷	雷貝塚	愛知県名古屋市長区鳴海町字白山・矢切	発掘		G.Groot	A1939 (S14) /8/17、18	土器、石器
LXXXIII	下山田			表採		川上氏寄贈	1930 (S5) /11/5 1931 (S6) /7/29 1933 (S8) /4/9	土器
LXXXIV	欠番または不明							
LXXXV	江原台貝塚	江原台遺跡	千葉県印旛郡白井町江原台		日本考古学研究所			土器、土製品、石器
LXXXVI	東平賀	東平賀遺跡	千葉県松戸市東平賀字大門前		日本考古学研究所			土器、土製品、石器
LXXXVII	馬高	馬高遺跡	新潟県長岡市関原町一丁目字中原		日本考古学研究所			土器
LXXXVIII	宮野		新潟県東蒲原郡日出谷村水沢宮野	A-表採 B-発掘		A、-Kokki 表 採、 E.Naberfeld 寄贈 B-G.Groot C-S.鈴木氏寄贈	A-1939 (S14) /8/25 (寄贈) 1940 (S15) /5/4	A-土器、土製品、石器 B-土器、石器 C-土器
LXXXIX	遺跡不明		鳥居博士採集品					土器、石器
XC	欠番または不明							
XCI	自由ヶ丘		東京都?					土器
XCII	子母口		神奈川県川崎市高津区					土器
XCIII	会下谷		福島県田村郡三春町会下谷?					土器、土製品、石器
XCIV	桜							土器
XCV	真福寺		埼玉県岩槻市					土器、石器
XCVI	浦和		埼玉県浦和					土器
XCVII	貝台貝塚	陣ヶ前遺跡	千葉県松戸市松戸字貝台		日本考古学研究所		1951 (S26)	
XCVIII	足高 (伊奈町)		茨城県つくばみらい市足高?					
XCIX	欠番または不明							
C	三宮貝塚		新潟県佐渡郡畑野町大字三宮深山					土器、石器、自然遺物
CI	藤塚		新潟県佐渡郡真野町大字吉岡字藤塚					土器、石器
CII	西志賀	西志賀遺跡 (西志賀貝塚)	愛知県名古屋市長区西区貝田町1・2丁目/ 北区西志賀町	表採		B、C-紅村弘	1944 (S19)	A-土器、石器 B、C-土器
CIII	常行院裏貝塚群		千葉県松戸市ニツ木					土器、石器
CIV	網走		北海道網走市					土器、石器
CV	フゴッペガワ貝塚		北海道余市郡余市町栄町					土器、石器
CVI	桃内		北海道小樽市桃内					土器、石器
CVII	ノボリ貝塚							土器
CVIII	余市		北海道					土器
CIX	太呂郡		北海道					石器
CX	フゴッペ	フゴッペ遺跡	北海道後志支庁					土器
CXI	岩内	岩内東山門筒文化遺跡	北海道岩内郡岩内町字東山		日本考古学研究所			土器、石器
CXII	大谷地		北海道余市郡余市町登町64他		日本考古学研究所			土器
CXIII	梨野舞納		北海道岩内郡共和町梨野舞納		日本考古学研究所			土器
CXIV	紋別		北海道紋別市					土器
CXV	ビボロ		北海道					土器
CXVI	後志茶津		北海道横丹町大字美国町字茶津		日本考古学研究所			土器
CXVII	本弘寺裏		北海道後志		日本考古学研究所			土器
CXVIII	遺跡不明		北海道後志 (古代文字付近)					土器
CXIX	北広島							土器、土製品、石器
CXX	遺跡不明		北海道 (ヒロシマ共同墓地付近)					石器
CXXI	遺跡不明		北海道 (ヒロシマ共同墓地付近)					土器、石器
CXXII	遺跡不明		北海道					土器、石器
CXXIII	黒坊	黒保遺跡	新潟県中頸城郡菅原村黒坊					A、B-土器、石器
CXXIV	東練兵場内貝塚	上台 (北台) 遺跡	千葉県市川市中国分5丁目		日本考古学研究所			土器、石器
CXXV	鳴島	(成島)	山形県米沢市成島		日本考古学研究所			土器、石器
CXXVI	小金井				日本考古学研究所			土器、石器
CXXVII	柿生				日本考古学研究所			石器
CXXVIII	塩尻町郊外		長野県東筑摩郡塩尻町郊外					石器
CXXIX	大根布港岸		石川県河北郡大根布港岸					石器
CXXX	南太田							土製品

表 1-4 遺跡番号リスト

遺跡番号	遺跡名：南山	遺跡名：行政	遺跡所在地	方法	調査団体	調査・採集者	調査年月	遺物
CXXXI	女篋貝塚		青森県むつ市田名部字女篋		日本考古学研究所			土器、石器
CXXXII	稲荷台遺跡		東京都板橋区稲荷台			白崎高保	1939 (S14)	土器
CXXXIII	新井遺跡		東京都世田谷区赤堤町新井			江坂輝弥		土器
CXXXIV	貝柄山貝塚		茨城県結城郡大花羽村花鳥			吉田格、江坂輝弥	1941 (S16) /11/9	土器、土製品、石器
CXXXV	野島		神奈川県横浜市金沢区六ッ浦町野島			B-G.Groot	1947 (S22) /1 B-1940 (S15) /8/16	土器、石器、釣り針、鹿角器破片 B-土器、natural remain, deer C-土器
CXXXVI	戦場ヶ谷		佐賀県神埼郡東背振村寺ヶ里			江坂輝弥	1941 (S16) /7/21	土器
CXXXVII	沈目		熊本県下益城郡城南町			江坂輝弥	1941 (S16)	土器、石器
CXXXVIII	入海貝塚		愛知県知多郡東浦町緒川 (入海神社境内)			江坂輝弥、紅村弘		土器
CXXXIX	宮脇遺跡		広島県芦呂郡常金丸村常宮脇 (品治別神社境内)			江坂輝弥	1947 (S22)	土器
CXL	黄島貝塚		岡山県邑久郡牛窓町黄島	A-表採		A-表採 - 時実黙水、 寄贈 - 水原岩太郎 B-酒詰仲男	1948 (S23) /5/25	A-土器 B-土器、石器
CXLI	石塚貝塚		愛知県豊橋市石塚町			江坂輝弥、吉田格	1947 (S22) /1/18	土器、石器
CXLII	折本貝塚	折本西原遺跡	神奈川県横浜市都筑区折本町		日本考古学研究所	B-君塚氏寄贈		土器、石器 B-土器
CXLIII	四枚畑	四枚畑貝塚	東京都板橋区前野町、志村			江坂輝弥、白崎高保、 和島	1938 (S13)	土器
CXLIV	宮谷貝塚	菊名宮谷貝塚	神奈川県横浜市港北区菊名町字宮谷 鶴見区上の宮			吉田格	1947 (S22) /2/5	土器、石器
CXIV	恋ヶ窪		東京都国分寺市西恋ヶ窪1丁目・ 東恋ヶ窪1丁目			甲野、吉田格	1947 (S22) /3/3	石器
CXLVI	横橋貝塚		千葉県市花見川区さつきが丘1丁目			吉田格	1947 (S22) /3	土製品
CXLVII	屋敷貝塚					甲野、吉田格	1947 (S22) /3/17	土製品
CXLVIII	飛ノ台貝塚		千葉県船橋市海神4丁目			君塚	1938 (S13) /9/25	土製品
CXLIX	遺跡不明		千葉県印旛郡富里村中沢新田			篠崎四郎		土製品
CL	中妻貝塚		茨城県北相馬郡小文間村中妻		日本考古学研究所	G.Groot、甲野、江坂 輝弥		土器、石器
CLI	六通	六通貝塚	千葉県緑区大金沢町六通		日本考古学研究所			土器
CII	城中		久賀村				1949 (S24) /2	土器
CLIII	下長沼	下長沼貝塚?	茨城県筑波郡十和田村下長沼		日本考古学研究所		1949 (S24) /2	土器
CLIV	十王台	十王台遺跡	茨城県多賀郡髭形村十王台弁天山			江坂輝弥	1946 (S21) /4	土器
CLV	瓜郷		愛知県豊橋市瓜郷町字東寄道・西寄道			吉田格、江坂輝弥	1947 (S22) /1/19	土器
CLVI	天戸	天戸公園遺跡か	千葉県千葉郡幕張町天戸		日本考古学研究所			土器
CLVII	境田	境田貝塚	神奈川県横浜市港北区茅ヶ崎町境田			江坂輝弥	1940 (S15) /7	土器
CLVIII	白井	白井 III 遺跡?	千葉県印旛郡白井村白井			鈴木 Yasumasa? 寄贈		土器
CLIX	藤沢		神奈川県藤沢市藤沢本町の駅付近		日本考古学研究所			土器
CLX	松戸向山貝塚	秋山向山貝塚	千葉県松戸市秋山・向山	表採		Nagase、篠遠発見	1950 (S25) /9/30	土器
CLXI	平戸遺跡	平戸台古墳群?	千葉県千葉郡睦村平戸			古墳より出土、加藤実 之吉氏寄贈	1944 (S19)	土製品
CLXII	真間	須和田遺跡	千葉県市川市真間 税務署裏 千葉県市川市真間 国分寺 千葉県市川市真間 久保上			君塚氏寄贈 (CLXI、CLXII) 君塚氏寄贈 (国分寺 CLXII) 久保上 CLXII3		土器
CLXIII	狭山群集古墳	ヒノサン山横穴群	鳥根県八束郡法吉村奥谷比之				1号墳-1949(S24)/4/19、 6号墳-1949(S24)/8/20 8号墳-1949(S24)/9/14~15、 9号墳-1949(24)/9/18	土器
CLXIV	大島村古墳		長野県下伊那郡			江坂氏父上寄贈	1931 (S6) /7/15	土器
CLXV	小向		青森県三戸郡向村小向	表採		長場忠司氏寄贈		石製品
CLXVI	田名部		青森県むつ市田名部			中島全二氏寄贈		石製品
CLXVII	下小屋戸	下小屋戸・津川				豊島喜太郎	1939 (S14) /6	土器



表 1-5 遺跡番号リスト

遺跡番号	遺跡名：南山	遺跡名：行政	遺跡所在地	方法	調査団体	調査・採集者	調査年月	遺物
CLXVIII	ダイエン寺	最勝院？	青森県弘前市大字銅屋町？		日本考古学研究所			土器
CLXIX	八田蟹		新潟県東蒲原郡阿賀町西川村					土器、石器
CLXX	立木貝塚		茨城県北相馬郡文間村大字立木					土器、土製品、石器
CLXXI	田戸	田戸遺跡	神奈川県横須賀市公卿町田戸		日本考古学研究所	赤星直忠		土器
CLXXII	永川神社内				日本考古学研究所			土器、石器
CLXXIII	二日市町		福岡県筑紫郡二日市町		日本考古学研究所			土器
CLXXIV	花園学園裏		東京都板橋区成増町花園学園裏					土器
CLXXV	園生長者山貝塚		千葉県千葉市稲毛区園生町			吉田格	1947 (S22) /8/10,11	土器、土製品、人骨
CLXXVI	瑞穂	瑞穂遺跡	愛知県名古屋瑞穂区瑞穂小学校北西 B-愛知県名古屋市南区瑞穂町北井戸田				1935 (S10)	土器
	筑地		茨城県結城郡大花羽村					土器、石器
CLXXVII	磯の森	磯の森貝塚	岡山県倉敷市粒江磯の森		日本考古学研究所			土器
CLXXVIII	日勝山		鹿児島県伊佐郡山野町小木原（日勝山台 上）			江坂輝弥、寺師見國		土器
CLXXIX	高山							
CLXXX								
CLXXXI								
CLXXXII								
CLXXXIII								
CLXXXIV								
CLXXXV								
CLXXXVI								
CLXXXVII								
CLXXXVIII								
CLXXXIX								
CXC								
CXCI								
CXCII								
CXCIII								
CXCIV								
CXCV								
CXCVI								
CXCVII								
CXCVIII								
CXCIX								
1J	藤枝	金木町藤枝遺跡	青森県北津軽郡金木町藤枝東田・澤部・ 蒔田米崎	発掘・表採	考古学研究所	J.Maringer、篠遠喜彦、 吉崎昌一、増田和彦	1953 (S28) /6/19 ~ 20	土器、石器
2J				表採				
3J	喜良市		青森県北津軽郡喜良市村喜良市上	発掘・表採	考古学研究所	J.Maringer、篠遠喜彦、 吉崎昌一、増田和彦	1953 (S28) /6/21	土器、石器
4J	砂沢	砂沢遺跡	青森県中津軽郡新和村砂沢	表採	考古学研究所	篠遠喜彦、増田和彦	1953 (S28) /6/23	土器
5J			青森県北津軽郡金木町、喜良市村 (金木町より喜良市村に至る間)	表採	考古学研究所	J.Maringer、篠遠喜彦、 吉崎昌一、増田和彦	1953 (S28) /6/21	土器、石器
6J	前杉		秋田県由利郡矢嶋町前杉	表採		篠遠喜彦	1953 (S28) /6/25	石器

表 2 記号対応表

S	土器破片	MJ IV	縄文晩期
St	石器及び石類	My	弥生
L	研究室	MH	土師器
LD	研究室内引き出し	Ms	須恵器
M	陳列室 (2 階)	Mpr	瓦など
MJ I	縄文前期	Mt	外口
MJ II	縄文中期	Sh	貝
MJ III	縄文後期	B	骨

**The current status and future task of archaeological sources owned by  
Nanzan University Museum of Anthropology  
-sorting out the material numbers**

HATA Yurika

This paper reports the current status and arrangement of archaeological sources owned by Nanzan University Museum of Anthropology. Those materials now collected and exhibited had been obtained through excavation, purchase as well as donation. Details of not a few materials remain uncertain because of many reasons. We tried to know when and how those materials had been obtained through sorting out the numbers of materials. We also use the results in order to make a ledger of archaeological materials. It is inevitable to prepare such a registry which enables us to manage all of our source information so that disclosure of information and use in research can be possible.

2022年2月14日 印刷

2022年2月18日 発行

## 南山大学人類学博物館紀要 第40号

編集・発行人 南山大学人類学博物館

466-8673 名古屋市昭和区山里町18

Phone 052(832)3147 (直通)

印刷 株式会社クイックス

456-0004 名古屋市熱田区桜田町19-20

Phone 052(871)9190